

---

# ひととけもの

亀山

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひとつけもの

### 【著者名】

亀山

Z35840

### 【あらすじ】

昔々それはそれは美しい獣がいました・・・ そんなおとぎ話が伝わる世界。そこそこ大きな街で暮らす本好きなひきこもりとそのお隣さんの女の子のお話。亀更新注意！

昔々のその昔。それはそれは美しい獣がいました。

獣はとても美しかったので人間に狙われるようになりました。

獣は人間を恨みました。それ以上に悲しくなりました。

なぜわたしがこんなめにあわなくてはならないのか。

そう人間に問うても答える人はいませんでした。

ある日、獣はひらめきました。  
わたししがけものだからねらわれるのだから、わたしはけものをやめ  
ればいいのだ。

獣は高い高い山に住んでいるという神様に会いにいきました。長い  
長い旅路の果て、人間に追われながらも獣は山を登り、神様に会う  
ことができました。

かみさまかみさま。わたしをにんげんにしてください。  
獣の願いを聞いた神様は驚きました。

お前はいつも人間に追われ、傷ついているではないか。なぜそんな  
人間になりたいと願う？

獣はしつぽをひと振りして答えました。

そうです、わたしはにんげんにおわれ、きずつきました。にんげん  
をうらみました。そしてにんげんをかなしみました。

でもそんなにんげんにわたしのこのちをやるのがいやなのです。  
とじこめられ、おりのそとからにんげんにみられ、やがてこひされ  
る「ひためいがいや」なのです。

神様は「うーん」と唸つてそれからわかつたと頷きました。

獸よ、お前を人間にしてやる。だが一つそのために無くしてほ  
いものがある。

なんですか。そう獸は神様に問いました。

わたしのこのみみですか。めですか。はなですか。それともこえを  
なくしましょうか。おをかみちぎりましょうか。

いやいや、そうではない。神様はいました。

無くしてほしいのはお前の感情だ。その心だ。それを無くさない限  
り、お前を人間にしてやることはできる。

獸は言いました。

よひこんで、よひこんでわたしのかんじょうをさせられます。このこ  
ころをせせざります。そんなことなど、このこのひとくらべればなん  
てたやすくことじょうか。

そうか、捧げてくれるか。神様は少し悲しそうにいました。

哀れな美しい獸よ、お前を人間にしてやる。そしてその命も延ば  
してやる。どの生きものよりもずっと長生きにしてやる。姿を  
変えてまで守りたかったその命、死がお前を迎えて行くまで大事に  
するがいい。

そして美しい獸は美しい人間になつたのです。



## はじまつのはじょ（後書き）

はじめまして、亀です。感想などあれば亀に向かって発信してくれればうれしいです。

割と見切り発車ですが、生温かく見てもらえれば幸いです。

## はつけんしたもの

「さーて・・・今日はどうやつて外に引きすり出してやうつかしら」

そう物騒な独り言を呟く少女の名はコノ＝メリクリス。

なんとも大層な名字を持つているが、彼女はいたつて普通の一般庶民だ。

メリクリスという名はかつて獣に人間の姿を与えた神様の名であり、その恩恵を願う人々が名字にすることが多い。よつて『メリクリス』は王族から一般庶民まで幅広く名乗られているのである。

さて彼女の目の前に立ちはだかるのは良く言つて古風な、悪く言つていかにも出そうな幽霊屋敷だ。

長年の雨や埃によつてついた汚れはなかなか取れるものではなく、もともと白かつたであろう館の壁は灰色へと変色している。さらに外壁と壁にはびっしりと蔓がはびこり、館の全体の雰囲気をより暗く表現している。シックでエレガントな装飾はその蔓にうずもれ、どこの誰がみても恥ずかしくない幽霊屋敷の完成というわけだ。

そんな幽霊屋敷にすんでいる変人がいることに気がついたのはもう6年ほど前になる。

当時8歳だったコノがこの館にボールを取りに行つたところその変人にばつたりと出くわしたのだ。忘れもしないそのファーストコンタクト。

「氣の毒なほどにおびえてる幼い少女に向かつてボールを探す」ともせずに睨みつけて消えろつてあんたは本当に人でなしよね！――」

「つるさい黙れ消える。そこにミルクの空の瓶があるから持つて帰つてまたミルクつめて持つてこい」

「消えろつていつたり持つてこいつていつたりビッちなのよー。つ

ーか私はミルク宅配便じゃない！！」

ユノがばーんと扉を開けるなり文句をつけたその変人はこちらをちらりとも見ることもせずに言い放つた。

こちらからは背中しか見えないが、その目は手の中にある本から離していないに違いない。部屋の中に光源は変人の手元にしかなく、オレンジ色に照らされたその部屋はどこを見ても本、本、本。どうやつてここまで本を手に入れたのか。いつそ図書館でも開けばいいとユノは思つ。

いつまでたつても出て行こうとしないユノに変人はしごれを切らしたのか、のそりとこちらに向き直つた。逆光となつた彼の姿はとても見えにくい。しかしこちらを睨みつけていることは何となくわかつた。

しかし彼の鋭すざめる眼光など6年も通い続ければ慣れてくる。ユノはさつさと彼の横を通り過ぎて一つしかない窓をカーテンもろとも開け放つた。とたんに入つてくる明るい光から逃げるように彼は焦つて窓から逃げる。あまりに焦りすぎて本の山に躊躇つて勢いよく床に転がつたほどだ。床に転がつた彼はゴン、と本棚にぶつかつて上からざざあと本が雪崩ってきた。本と埃に埋もれた彼はその鋭い目つきを半眼にしてユノをじとつとねめつける。

「・・・なにすんだよ」

「何つて窓を開けただけよ。こんないいお天気に窓閉め切つてるなんてもつたいない。おまけにカーテンまで・・・」

「俺は夜行性だからいいの」

「夜行性でも田には当たらないと病気になるわよ。おひさまは神様の化身。あらゆる魔を払ってくれるんだからー」

あつぱりと言い放ったコノに彼はくわあと大きなあくびをお見舞いした。埃をかぶった白っぽい髪をがしがしと搔いてもさりと立ち上がる。滅多に立つことがない彼が立つことに恐怖を感じたコノは両ひじを体の前に持ってきておそるおそる声をかける。

「なによ。じこくのよ」

「寝る」

「・・・・・はあ？」

「夜までこは帰つて。今日一日お前にかまつ暇はない。・・・寝すぎで」

「え、ちゅ、ちゅつとまつてよー軽く何か食べないと体もたないわよー？」

「食つよつ寝る」

「ねえ、このサンドイッチ頑張つて作ったのにー」

必死に声を掛けるコノを氣にもかけずに彼は奥の寝室へと至る扉を閉めた。

自作のサンドイッチの入ったバスケットを振つていたコノはガクリ、と肩を落とした。

「また今日も惨敗、か・・・」

のそりと奥の部屋へと消えた彼の名前はティアンといつ。

幽霊屋敷に住み、本に囮まれて暮らしている・・・これはまさしく変人としか言いようがない。

外見年齢は20代後半、日に浴びないからか体全体が白っぽく、しかしもやしというほど軟弱な体躯ではない。強いて言つなら肉食動物のような美しさを持つているのだ。

無駄に鋭い目といい、本能に任せて生きる姿といいまさに肉食動物。まあ肉食動物が本を好むというのはいたつて奇妙ではあるが。

そんな肉食動物の美しさにあてられ、さらに目を離せば栄養もとらず日にも当たらないダメ人間のギャップにあてられ、こうしてユノは6年間毎日ティアンの元へと通つている。

せめて外に出したい。その願いは今まで一度も果たせたことはなかった。

帰り道、ユノははあとため息をついて幽霊屋敷の隣にある自分の家へと向かつていった。

そう、ユノの家はこの幽霊屋敷のすぐ隣だ。

安くて広い家を購入できたんだと両親に連れられた家をみて子ども心になぜ安いのか察した。同時にこの家を買った両親に若干の不信感も刺したものだ。

そのことをまた思ひだし、ユノは頭を抱えたくなつて目線を下げた。がその時視界の端に奇妙なものを見かけてふとソレを目で追いかけた。

追いかけたといつても相手は動いていたわけではない。そもそもこのあたりは幽霊屋敷を怖がつてゐる人が多く、必然的に人通りは少ない。だからこそソレはよく目についた。

「・・・なによこれ・・・」

コノは道のド真ん中、幽霊屋敷とコノの家のちょうど間に倒れてい  
るぼろぼろの人影を見て頭を抱えた。

## やめつけの（漫畫）

ちなみにひとつ上のやめつけものも、もつねなタクセントで読んでも  
らえたら嬉しいです

道端に倒れていた人は本当にボロボロだった。

伸び放題の髪はあちこちに泥がこびりつき、草木の枝を引っ掛けた。体は泥水を頭からかぶつて砂漠にでも飛び込んできたのかと思うほど汚れていて、衣服はもはやただの使い古した雑巾当然。荷物は誰かに取られたのか、見当たらなかつた。正直ゼーゼーと彼が荒い息をしていなかつたら死体と間違えていた。それほどひどい有様だつたのだ。

ユノが慌てて家族へ知らせなかつたら彼の命はそこでつき果てただろひ。

彼は三日間生死の境を彷徨い、意識が戻るまでさらには三日かかつた。意識が戻つた時点で彼は家から出ようとしたのだが、メリクリス家のにこやかな鬼メアリ＝メリクリス・・・つまりユノの母によつて押し戻されたのだ。

いつもゆるゆるとしている母が、あれほどの殺氣を放つたのはかつて父の浮氣疑惑が出たとき以来だと後にメリクリス家の子どもたちは話し合つた。彼女は怪我人と病人と父には容赦しないのだ。

それはともかくまた一週間ほど体力が回復するまでメリクリス家にとどまることになつた彼は苦笑してよろしくお願ひします、とベッドの上から頭を下げる。

「あ

彼のベットの隣でミレの実（消化しやすく栄養のある果物 病人食として定番）を剥いていたコノはここ最近のことを思いついて思わず声をあげた。どうしたんデスカ、とベットの上から彼が怪訝に尋ねる。

他の国からきたのだという彼は言葉が若干不自由だ。せりにこの国での名前がまだないらしく、じゃあ私が考えてあげるとコノが安請け合いをしたのがついさっきのことだった。

「まだ心配そうにコノを見る彼に何でもないと頭を振つてコノは心の中で呟いた。

「私最近ディアンにあつてない。

そつ考えるとディアンが一人でいることに不安を感じた。だが彼なら何もしなくとも生きているという確信があるので大丈夫のはずだ。たぶん。きっと。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「えつと・・・本当に大丈夫デスカ？ 気分が悪いんジャ・・・・」

「う、ううん、本当になんでもないの！ 気にしないで！」

そうデスカ、と小首をかしげる彼。えへへへーと白々しく笑うコノ。なんとも気まずい。

ミレの実を一人して食べた後も空気は凍つたままだ。

そんな空気を払拭しようとしたコノは話題変換を試みた。

「それよりもさー、その髪いい加減切らない？」

「H、」

とたんに彼はうわあ藪蛇ともいいくそな顔をした・・・といつても今彼の顔は伸びに伸びまくった黒髪のせいで顔の上半分は覆われ、感情その他は露出した口元と雰囲気でしかわからないのだが。確かに切るにはもつたいたい綺麗な髪だ。けれど。

「ねーえ、お母さん、散髪用のはさみどーにやつたつけ?」

「きょ、拒否権は無しデスカつーーー?」

「はさみならそこの棚の三段目の中に出しにあるナビーーー、ビリするの?」

「ちょっとメリサン・・・・!」

「あのねーleonの毛切つてあげようと思つてーーー」

「あの、コノサン。そのleonつて俺の名前デスカ?俺犬デスカ? (レオンというのはよく犬につけられる名前。例:ボチ)

「あらよかつたわねーleon君」

「メリサン・・・たまにその優しさが痛いデス・・・」

髪を切ることを嫌がるleon(確定)をなだめすかして渋々後ろ髪をきることを了承してもらつたコノは嬉々として美しい髪にはさみを入れる。

じょぎり、とはさみが音を立て、同時に黒々とした髪がぱさつとコノの足元に落ちた。

コノは休まずにはさみを動かす。じょぎり、じょぎり、じょぎり。

「全く何も手入れしてないのにこんなきれいな髪だなんて・・・いなあー」

そうコノは嘆息する。

「? コノさんの髪も綺麗じゃないデスカ」

「私は頑張つてこれなのよ。しかもまだまだ跳ねるし」

コノははさみを動かす手を止めてミルクティー色の自分の髪をひとつ房とつた。毛先がくるりと丸まってしまっている。毎朝これを直すのにどれだけの時間をかけているか。

いじいじと自分の髪をいじつているコノを気にかけたのか、レオンは自分の頭をのけ反らせた。その口元はにっこりと弧を描いている。

「おれはその髪いいと思いまスヨ？ コノさんにあつてマス」「レオン・・・」

褒められることは少なかつたコノの髪。それを無条件に褒められてコノは嬉しくなつてレオンを後ろから椅子ごと羽交い絞めにした。

「ありがとあつつー」「ちよつとコノさんはさみハサミッ！…」

ぎやあと悲鳴をあげるレオンが何だか面白く、コノはくすりと笑うと最後のひとつ房を切り落とした。

「どーよこれでー」「おー上手ですね、コノサン」「でしょー？ だてに妹や弟の髪切つてないわ」

レオンはよほど髪型が気に入つたのか、いろんな角度から鏡をのぞき見る。

一人後片付けをしながらコノは日の角度を確かめた。

あと数分もすればあたりは真つ赤になるだろう。慌ただしくなつたコノにレオンは気づいたらしく、どこかでかけるんデスカ？と尋ねてきた。

「あ、ちょっと隣の家に・・・」

「今カラ? もうすぐ日が落ちマスヨ?」

「だから早く行こうと思つて」

「近くつて言つても女の子の独り歩きはいけマセンー。俺もついていきマス!」

「大丈夫よーそれにレオン病み上がりじゃない」

「病み上がりでも体力つけるために散歩は不可欠なんデス!」

いやに粘り強いレオン。時間が惜しいコノはしづしづレオンの同行を許可した。

「・・・・・・・・霧囲氣ありマスネー・・・いかにも出ソウナ・・・・」  
「だからいつたでしょ? 大丈夫?」  
「あ、幽靈とかは平氣デス。ただここまで立派なのは見たことがナクツテ」

これと同じような館がたくさんあつたら住民の精神的に困る。

好奇心いっぱいのレオンをみて本当に犬のようだと思つたコノはしあしそのことを顔に出さず、一週間ぶりとなる扉を開けた。

「ディアンー久しぶりー」

「お邪魔シマスー」

それぞれ声をかけ、コノはいつもより一室へと向かう。ディアンがいることの多い場所だ。

いろんなところに落ちていて本に氣を取り戻してくるレオンにひやひやしながら扉を開ける。

とたんに壁にぶつかり、コノはぶふと変な声をあげた。

「鼻がいた・・・ってあらディアン」

「・・・・・・・・遅かったな」

壁だと思ったのはディアンの腹だつたらしい。思いつきりあたつてしまつたが、ディアンは氣にした風もなしにコノをじりりと見た。

「何よ。ミルクならちゃんともつてきたわよ」

「なんでもない・・・といひで後ろの奴はなんだ」

レオンのことをすっかり忘れてたとコノは振り返った。思った通りそこにはレオンがいてじっとディアンを見つめている。ディアンも氣になつたのか、レオンを見下ろしている。

コノのちゅうぶの前で肉食動物と犬の視線がかちあつた。



## すみつぐもの

問題です。

犬と肉食動物がかちあいました。

どうなるでしょう？

「でこの文章はけものがただの獸ではないということを表すのだとおもうの『テスガ！』」

「いや、ここに『けものはひかるいわをくだいた』とあるだらう。光る岩・・・つまり宝石だな。推測でしかないが、『とても堅い』と強調しているからにはおそらくダイヤだらう。よつて光る岩＝ダイヤの塊と思われる。さらにダイヤは権力の象徴だ。その塊とうことだから貴族、それもかなりの地位にあるものだらう。それを砕いたということは・・・」

結果・慣れ合いました。

ユノは椅子に深く腰掛けてはあとため息をついた。

二人が議論を交わしているのはこの国に古くから伝わる童話だ。

美しい獣が人間に追われて神様に人間にしてもうつとこうよくある物語。

だが神様に会うまでの話、人間になつてからの獣の冒険が面白く、子供にも大人にも愛される話だ。

ユノも好きな童話だが、彼らほどではない。

ディアンがこの物語について研究しているのは知っていた。なにしろこの館にある本のほとんどはけもの関係らしいから。でもまさかレオンまでその変人の仲間だとは思わなかつた。

「ねえ一人とも……」

「ではここでの『けものはせかいのとびらをぐぐつて』とはどういう意味だとディアンさんはいうの『テスカ?』

「世界の扉」というのがよくはわからない。だが身分の差があまりにあることを住む世界が違うというだろ。そのことを指しているのでは、と俺は思つてゐる。つまり貴族へ獣はなつたんじやないか」「…………」

ここに住む世界が違うと実感してゐる人間がここに一人いますよ」といいだしたくともユノは言えなかつた。

にしても、とユノは思う。

こんなに饒舌なディアンを久しぶりに見た。

前に見たときはうつかりディアンにけものの話を振つてしまつたためひどい目にあつたのだ。

よく話が合うものだ。ちょっとレオンに嫉妬してしまつ。

ユノから不穏な空氣を感じたのか、レオンの方がびっくりと跳ね、ディアンはといふと今気づいたように椅子に膝を抱え込んで座つてゐるユノを見る。

鋭い視線にユノはふいと顔を背ける。・・・すねている。

ディアンは怪訝そうにユノを見てすたすたと近寄つてくる。ユノは威嚇するよつにより自身を引き寄せて縮こまつた。

まるで肉食動物は快える猫のようだといふのは思ひ、  
しかも肉食動物は猫の扱いに慣れていないようでじつにか猫をあや  
そうとしてはいるが、効果はない。

「何よ」

「食わなしのか？」

野菜丸ごと煮しても効果だらけ。

黒菜をこぼしてモロヘイヤと炒めたり。

「…………だから何よ」

レオンは「によによと二人の様子をうかがつた。」とユノがそんなレオンに気づいた。やばい。

「」

じとつとした眼をした「

「どういたしまして、お嬢様。」  
レオンは、さすがに驚いていた。

「そろそろ帰りますよ・・・ほら、用事は済んだし、貴方病み上が

「ア・・・そうデスネ」

てつきりによじぬいていたことを責められたと思つていたレオンだったがそんなことはなかつた。

一瞬呆氣にとられたレオンだが、にっこりと笑つていつた。

「でも、俺ここにこいたいデス」

「……え？」

「というかここで暮らしたいデス。ねえ、ティアンさん、ここに居候させてもらつていいデスカ？」

家事とかやりますからお願ひシマス……とティアンに頭を下げる。

そんなレオンにユノが慌てたように言つ。

「ちょっと、何突然……」

「いいぞ」

「いいの……？」

あまりに早い回答にユノはティアンを振り返つた。そんなに簡単に決めていいものなのか。

しかしレオンはその返事に喜び、では先に戻つてこれからティアンさんのお世話になることをメリクリス家の皆さんに伝えてきマスネ！と飛び出していった。

ユノにはレオンの尻にぶんぶんと音を立てて尻尾が振られている幻覚が見えた気がした。

そのあと帰ろうと玄関を出たユノのあとをティアンがついてきた。

「え、何？」

「送つてく。ついでにあいつを預かるとお前の両親にも言つとく」

「そう……」

6年間全く外に出なかつたティアンがこんなにも簡単に扉からでくるのを信じられない思いで見ていた。そういうえば外はもう真つ暗だ。

今まで日が暮れる前に追い出されていたのとこんなことはなかつた。

たとコノはほんやりと思ひ返した。

ディアンがよもやコノとレオンが兄弟だと勘違いしているなんて思  
いもせずコノはゆっくりと歩を進めた。

「アリいえば、最近行かなくつてじめんね？食糧とか大丈夫だった  
？」

「一応の貯蓄はあるから問題はないが・・・」

「？」

じつに田を向けてくるコノにトイアンはなんでもないと話題を切  
る。

夜に入りかけた空気は少々肌寒い。ぶるりと震えたコノの田に我が家  
の温かい光が映る。

そのときトイアンが何かつぶやいた気がしたがコノは気づくことは  
なかつた。

すみつけもの（後書き）

「少々、さみしかつた」

## おかいもの

隣家に新たな住人が増えてから数日後、またコノは隣の館の門の前に立っていた。

その手にはいつものバスケットはない。今田は食べ物を届けに来たわけではないのだ。

「あ、コノさんゴンニチハー」

玄関の埃を掃いていたレオンがコノを見つけて口元をほころばせた。

コノも釣られてへらりと笑う。

「今日もありがとうございましたアレ?」

コノの手にバスケットがないことに今さら戸惑ったレオンは小首をかしげる。

とハツと息を飲み、おそるおそる口を開く。

「ま、マサカ……ついにティアンさんに愛想を尽かシテ……  
・！・？ごめんなサイ、俺今一文無しなので一人分の食べ物を工面する」とはぢう一円……後生ですからせめて職が見つかるまで食べ物だけは恵んでくれませんか……！……？」

「ま、まつて揺らさないで目が回るつー」

生活がかかっているためか、必死な表情で肩を揺すぶるレオンにコノは慌てて押さむ。

「ち、違うの。今日は確かに食べ物持つてないけどあげないってわけじゃないの」

「？じゃあどうして……」

？マークを頭に浮かべるレオンにコノは「ディアンはどうって聞いた。

先日、ディアンを外に出すと「う目的は一応達成された。しかし、コノとしてはさうにそのままの上の段階まで行きたい。そう、例えば。

「ねえ、お買いもの行かない？」

「断る」

即座に後ろ姿で拒否されたが、そんなことでコノがめげると想つてか。さらに食い下がる。

「ほり、昼じゃないと手に入らない食べ物とかあるし。野菜も新鮮なものがいっぱいあるよー ミルクもあるよー」

「う・・・」

ちょっとと反応した。コノはほくそ笑んだ。気分は猛獣を餌で釣る調教師である。

ほーらほーらと肉を田の前で振りかざしてやり、火の輪をくぐらせよつとしているのだ。じつと汗が額にこじむ。

6年ここに通い続けてコノにはわかってきたことがある。この男は実は欲望に非常に弱い。

特に一番強いのは知識欲でその次に睡眠欲。その次くらいに食欲が

ある。

さらになぜかディアンは野菜とミルクが大好物なのだ。ユノがここにずっとこなたのはこの二つを持ってきていたからという理由も大きいだろ。・・・悲しいことに。

というかどう見ても成人済みの男の好物が野菜とミルクとは何事だ。

少々物悲しくなりながらユノは必死にディアンを誘う。

だがしかしこの猛獸は食欲よりも知識欲の方が勝つていたらしい。  
「・・・・・昼間に外に出るのは嫌だ。それにこの本の意見がなかなかに興味深くてな・・・。 そうだ、レオンを連れていけ。金ならそこの引き出しに入ってるから持つていけばいい

それだけ言つと本のところになつてている猛獸は餌に食いつこうとはしなかつた。

んて読めないのよ・・・」

「そうですネエ・・・あ、コノサン、この「エンジン安いデスヨ! 一本60ピレなんて破格の勢いデス!」（ピレ お金の単位 1ピレ=1円）

「あらやだ本当! ねえ、おじさんいいの?」こんなに安くして「いいのいいの。」いつも豊作だからってひいきの農家に押し付けらちまつてなあ・・・1本なんて言わず10本で500ピレでもいいぞ?」

「やだおじさんかっこいい!」

「ヨシ! 太つ腹! で、これ2つとあれ2つせらにそれも入れて1000ピレ払いますけどいいデスカ?」

「おつ兄ちゃんなかなかやるねえ・・・いいぞ持つていけ!」

「ありがとう! ゼーマス!」

がつはつはと豪快に笑う青物屋の主人にレオンは笑顔で頭を下げる。にこやかに品物を入れた袋を奥さんから受け取ったコノはさつきの不機嫌はどうに言つたのやら、張り切つてパン屋の方角へ足を向けたのだった。

「いつも買いましたネエ・・・」

「そうね・・・さすがにこれは買いすぎたかも・・・」

「あ、でもこれぐらいだったら俺持てマスヨ?」

「え? ゼーフ?」

まあ一応男ですし・・・と笑うレオン。今一人がいるのは通りの端にあるミルク屋だ。

ふえーと声をあげるコノ。

「私とあまり歳変わらないみたいなのには“”いねえ

「歳が変わらない……ッテ？」

「え？ レオン16歳じゃないの？ 私14歳だけど

「…………」

口を開閉していたレオンだったが、しばらく頭を抱え、唸るような低い声で何かをつぶやいた。

ユノはその言葉を聞き取れず、というよりも知らない言語だつたため、ただ首を傾げていたがやがて何かをあきらめたようにレオンが言った。

「俺…………19歳テスヨ…………」

「…………え？…………は？」

思つてもみなかつた事実にユノはただ口を開けていることしかできなかつた。

## おしゃべりの

「19・・・・・・・・?」

「ええ、ハイ。19です」

ユノは驚愕で口を開いた。

目の前でそんなに俺若く見えますかネエ・・・と苦笑しているレオの体つきはどう見ても19歳のそれではない。なんか細いし、身長もあまり高くはないし・・・とはいってユノよりは20トルほど高いのだが。（トル 長さの単位）

19歳というのは大人の仲間入りをしているものなのではないのか。もつとがつしりしてているものではないのか。

なにより

「え・・・うそまさかそれでノクス兄さんと同じ年なの?――」

「それでってなんですかそれでツテ・・・・」

おののくユノにがつくつするレオン。

「どうかお兄さんいたんデスカ。家にはいませんでしたヨネ?」

「ああ、うん。今家いないから・・・王宮で働いてるの」

ミルクを受け取つてまた一人は歩きだす。時刻はもうすぐお昼を過ぎようとしていた。

館についたらレオンが何か作つてくれるといつので、ユノは期待を胸に両手いっぱいに買い物袋を抱えなおした。

「王宮……デスカ？ それってすごいことなんかジャア……」「そりなんだけど。でもなんか下っ端の仕事しかもらつてないみたいに。」「

レオンがユノの方を向く。片手でユノが持つているものよりも大きい紙袋を抱え、もう片方の手は一つの手提げで埋まっている。重そうだが、レオン曰くまだまだいけるとのこと。

「そうデスカ。 どんな仕事ヲ？」

「なんでも動物探してるんだつてー。今の王様の5番目の王子様が探してるとかなんとか」

「ほウ……ペットでも逃げたんですカネ？」

「ね……そんなことで他人を動かすのはどうかとも思つけど」

ユノはふうと息を吐いた。手の中の荷物が重い。

「でも私いいなあつて思うの」

「何がデスカ？」

「ノクス兄さん。学校行けてそのあとも下っ端とはいえ働けるんだもん」

「あれ、ユノさんは学校にはいってないんデスカ？」

「いってないよーつていうか学校行けるのは男だけだし」

ユノは苦笑しながら言った。レオンが意味がわからないといった顔つきをしている。他国では制度が違うのだろう。ユノはこの国の教育制度について話し始めた。

「あのね、9歳以上の男の子は学校行くのを許されるの。それから確かに18歳まで勉強しているんだところで働くの。ノクス兄さんみたいにね。女の子は読み書きもできないのが普通なんですって。あ、

貴族の子は家庭教師とかつけられるらしいけど

「エ・・・でもユノさん、読み書きできるじゃない『デスカ』」

「簡単なところはノクス兄さんが羨ましくって駄々をこねて教えてもらつてたの。でもそのうちノクス兄さんは学校が忙しくなつて教えてくれなくなつたし、母さんはシユリンとノリンに大忙し」

「あ、シユリンとノリンってあの双子ノ？シユリンが男の子でノリンが女の子ノ」

「そう、そつくりでわけわかんないでしょ」

「エエ、もう見分けがつかないから名前あまり呼んでない気がシマス・・・」

「賢明な判断だと思う。あの子たちお互いに一緒にいるのが好きなんだけど自分がもう一人と間違えられるのは嫌いだから」

ユノはもうじき8歳になる可愛い兄妹を思い出してくすりと笑つた。そのうちシユリンが学校へ行つてしまつてノリンがぐずるのは確實だ。

「女の子は学校に行けないん『デスカ・・・不公平』『デスネ』

「しようがないわよ、家事とかやることはいっぱいあるんだから。子どもがみんな行つてしまつたら家の中では人手が足りないわ」

「そうですケド・・・」

「でも私はあきらめなかつた」

「え、ちょっとなんか雲行きが怪しくなつてきたん『デスケド』」

ふふふ、と笑うユノにレオンが数歩下がる。それにも関わらずユノは口を開いた。

「私がなんで館に行くことになつたか知つてる？」

「エエ。ディアンさんから聞きました。なんでもボールが館の中に入つてきてそれを取りに来てからずつといつてるとかナントカ・・・

・

「そりゃ、初対面で『消えろ』とか言われたのよ。ひどくない?」

「まあそれは確か?」

でもディアンさんなりいそうだと納得顔のレオンにコノは楽しそうに言ひ。

「そのときね、怖くてたまらなかつたけどまた次の日行つたのよ、食べ物もつて」

「アア、それはディアンさんも不思議に思つてたみたいデスネ。なんでなんデスカ?」

「本よ」

「…………へ?」

「少しでも読める本があるのを見つけてしまつたのよね、私。それからいってもたつてもいられなくなつて、食べ物持つて館に行つたの。あそ?、本だけは腐るほどあつたから。ほとんどけもの関係だつたけど」

「つまり学校で習わないかわりに館の本で学んダト……」

「そう。まあじきに飽きたんけど最初は本めあてであそこに通つていたわね」

懐かしい、と目を細めるコノ。しかしレオンはあれ、と何かに思い当つてそのままコノに質問した。

「最初ツテ……じやあ後からめあてが別のものになつたんデスカ?

?」

「ああ……わからない?」

「まったくわかりません」

「ディアンよ。あのダメ人間加減には子どもながらに心配になつたのよね。氣を使って食べ物持つていつてもほとんど手をつけないし、

声かけないと寝ないし。しかもお肉食べないのよあこいつ

・・・・・・・・・・  
納得デス

「いつも野菜とミルクしか消えてなくつて、メインディッシュのはずのお肉が『あれ・・・? なんでぼくまだここにいるの・・・』と言わんばかりに残されてるのを見た時には愕然としたわよ」

許しがたいデス！」

「そうよ、作つた人の気分になればいいんだわ！」

「そうテスヨ！ よし、今夜のメニューは決まりテスネ……」「なに？ なんなの？」

レオンはにっこりとした。た。

「お肉のフルコースデス。ふふふ……腕が鳴りマスネ……」

「やだそれおいしそう！私も食べていい？」

どうやら今日帰るのは遅くなりそうだ。ユノは嬉々として館の門をくぐりぬけた。

無理やり視線を本に戻すとある一節が田の中に飛び込んできた。

『こまでもおひさまはけものをかがしていきます』

ただの童話の話。ここから隠されている事実を読み解くのがティアンの仕事だ。

失った記憶を取り戻すために。

館の中が騒がしくなつてきた。ティアンは今日の仕事はこれ以上進まなさそうだとため息をついた。

## おしゃべりもの（後書き）

タイトルは大抵最後に「～もの」と付けるのが決まりなので（私の中で）無理矢理感が漂いますが軽くスルーしてやってください。

## たべもの

「ディアンは食卓にある光景を見て盛大に顔をしかめた。

ステーキにハンバーグにビーフシチュー・・・考えつく限りの肉料理に申し訳なさそうにパンが数個。

野菜など一枚も見当たらない肉肉しい光景は体に悪そうだ。色どりなんて知るものか！とばかりに茶色一色に染まつたテーブルにまだまだ料理を追加する一人。

数分して料理が出揃うとぱうつと立つて『ディアンに気づいたのか、二人してにやにやとディアンの顔色をうかがう。

そんな一人の目を無視してディアンは食卓に着いた。

レオンもコノもそれに従い、ナイフとフォークを扱うディアンの手をじっと見る。が、その手はあまり動かされることはなく、すぐに食器はかちやんと置かれてしまつた。

それから動こうともしないディアンにコノはむつとしながら、レオンはいつも笑顔で首をかしげながらそれぞれ口を開く。

「なによ、何か問題でも？」

「好き嫌いはいけませんヨー？」

「好き嫌いはしていない」

はあと息をついてディアンが言つ。その割にはあまり食事に手をつけてはいない。

ぐいとミルクを飲みほすとわざと席を立つてしまつ。

「作業に戻る」

「ちょっと、まだ食事は終わっていないわよ！」

「セウテスヨー。ちゃんと食べないと体力持ちまセンヨ?」

「ここにこと笑つてレオンがディアンの行く手を阻む。ディアンはレオンの前に立ち止まるその鋭い眼光を光らせた。

「そこをどいてくれないか・・・?」

「断りマス」

むづとした表情のディアン。にっこりと笑うレオン。だが各自背負うオーラは猛々しい。片方では肉食獣が唸り、もう片方では犬が牙をむく。

「いいデスカ、食事のバランスは大切なもののデスヨ? 確かに野菜も大切デス。しかしあ肉を欠かしてしまつと血が少なくなつタリ、筋肉が衰えてしまつて大好きな本も読めなくなりマスヨ?」

「・・・それは困る」

ちよつと躊躇したディアンの片腕をユノが引っ張り、食卓へと導こうとする。肉食獣のオーラが薄まつた。

「そうよ、それに二人で頑張つて作つたのよ? 食べてくれないとつたひないじゃない!」

「むう・・・」

真剣にディアンの体を心配してくれていることはわかる。ディアンもそこまで鈍感ではない。

ほかほかと湯気を立てている料理は確かに美味しいそだが、ディアンはそれでも首を横に振つた。

「やつぱりいらない」

「どうしてよ！」

「気に入る料理がありません？シタカ？レシピを教えてもらひえばがんばつて作りマスガ……」

食こさがる一人にティアンは迷いながら口を開く。

「えーと……実は肉料理を食べると持病の癪がうずいて……」

「なによそれ。そんなの聞いたことないわよ」

「そもそも癪は食べ物とは関係ありマセン」

田を泳がしながらティアンにコノとレオンはじとじとした田を向けた。

嘘くさい。

「それなら……肉料理は母の敵で絶対に食べないと決めていて」

「なによ母の敵って。食中毒？」

「料理のせいにするのは頂けませんね。恨むなら料理人デス」

顔にいくつか汗を浮かび始めたティアンにさらに一人は詰め寄った。そんな言葉でだませるとでも思ったのか。

「じゃあ肉料理を食べてはいけないと死んだ父からの遺言で」

「じゃあってなによじゃあって」

「遺言ナラ……仕方ないデスネ……」

「……？」

どう聞いてもいいわけにしか聞こえない言葉にレオンが納得したことに驚いたコノはレオンを見やる。しかし、レオンは心の底からその言葉を信用したらしく、腕を組み、うんうんと頷いている。

納得しきれないユノはディアンを問い詰めようとディアンに向かひ立ったが、時遅く、すでにばたんと扉が閉まっていた。

「ちょっと、なに納得してんのよ!」

ユノはディアンを止められなかつた気持ち少々、あんな言葉を信用したレオンを攻める気持ち多数でレオンに詰め寄つた。  
そんなユノをビリビリと押しどじめながらレオンは言つ。

「ダツテ、遺言は絶対守らなければならぬの『デスヨ』。まあユノサン、冷めないうちに食べてしまってまシヨウ!」

「食べるけど!」ディアンのために作ったものなのに・・・

ユノは力なく足元に視線を落とした。

肝心の本人にあそこまで食べることを拒否されてしまうとさすがのユノも悲しい。作っている最中の楽しさがどこかに吹き飛んでしまつた。

そんなユノにレオンがやせこし言葉を掛けた。

「そうですね、でもディアンさんも作ってくれて嬉しかつたと思いまスヨ? だつてほんの少しあはいえ食べてくれたじゃない『デスカ』」「そうだけど・・・」

ディアンが手をつけた肉料理と言えばハンバーグの端っこ。端っこ。肉と言えるのかどうかわからぬほど少量だ。それを食べたというのかユノには分からぬ。けれどレオンにとってそれで充分なのだろ。

「それにあそこまで拒否するのには何か理由があると思こマス。ユノさんにああまで言われても拒否したくらいですカラ」

「理由ね・・・そうよね・・・でもそれって私達にも言えないと

？」

「人にはいろいろ秘密があるんデス。そういうものの『テシヨウ』？」

レオンはそういうとさあサアと言ひてコノを椅子に座らせた。

「とにかく俺たちがやるべきことは」の料理をいかにして無くす」とテスヨ。この量は迫力がありマス」

「こざとなつたら家に持つて帰るけど・・・多いわね。食べきれなかしら?」

「食べなかつたら料理と素材に申し訳ないデス。残さず食べまシヨウ」

「そうね、では神と食物に祈りを捧げて」

「いただきマス」

かちやかちやと食器の音が鳴り始めたのを扉越しに聞いてテイアンは胸をなでおろした。

あれ以上はきっと腹が受け付けない。

何故自分が肉を食べられないのかは分からぬ。魚なら食べれるのに。

ティアンは頭を搔き、じきくまにまぎれて持つてきたミルクの瓶のふたをぱかりと開けた。

## たべもの（後書き）

たまに活動報告のほうで設定ともいえなによつた何かを呟いている  
ので気になる方はどうぞ！

亀のテンションが気持ち悪いことになっていますが！

## わすれもの

「ここにちはー・・・？」

なんかいつもと違う。いつものように館の扉を開けたユノは違和感に首を傾げた。

そして本だらけの部屋に入つて、ディアンの後ろ姿を見つけるとその原因に気づいた。

「あれ？ ディアン、レオンは？」

館に来ると、いつも笑つてバスケットを持ってくれるレオンがない。

来ないときは大抵この部屋でディアンを議論を交わしていてその声が扉を閉じていても聞こえるほどなのだが、その声も聞こえない。本に没頭しているのかと思えば部屋のどこにもレオンはいない。こちらに後ろを向けていたディアンはもぞりと動いてユノを確認するもまた本へと戻る。

「ああ、犬か」

「犬つて・・・」

確かにその名前を付けたのはユノだが、さすがにそんな風に言われる可哀想だ。

それに犬につけることの多い名前ではあるが、もともとの意味は『勇敢な・猛々しい』である。

ユノの視線に非難の色が含まれたのを感じたのか、ディアンは『冗談だ、と何でもなさそうに』と言つた。

「レオンなら材料が足りないとかで買い物に出かけた。古本屋にも寄つて行くともいつてたな」

「ふうん・・・じゃあ遅くなりそうね」

ユノはほこり臭い部屋の空氣に顔をしかめ、つかつかと窓へと歩み寄る。

その動作に何か気づくものがあつたのか、ディアンは自分の近くにあつた本をおもむろにもつて移動を始めた。

ユノがカーテンと窓を解き放つて後ろを見るとディアンは窓から入つてくる光と新鮮な空氣を逃れるような場所に腰を納めていた。そこまで行くのに躊躇したのか本の山がいくつか崩れ、当の本人はそんなこと知るかと言わんばかりに本とにらめっこをしている。

ユノは相変わらずなディアンにふうと息をつくと自分も暇つぶし用にその辺に落ちている本を手に取る。そしていつの間にかユノ専用になりつつある長椅子へと近づいてすとんと腰を下ろして本を開いた。

本の題名は『けものにおける食物の由来』・・・なんのことだか。

レオンが来る前となんら変わらない風景。まるでレオンはここに最初からいるなかつたみたいだ。

もし私がここに来なくなつてもこの男はまるで変わらないんだろうな、とユノはぼんやりと考えた。

食べ物の確保には苦労しそうだが、ディアンなら何とかしそうだ。ユノが来る前でも一人でこの館に住んでいたのだから。

日の光と空氣は睡魔をおびき寄せる。ユノはなんとか眠氣と戦おうとしたが、徐々に落ちていく瞼はどうやら理性よりも本能の味方をしたらしく。ユノはおとなしく白旗を上げ、長椅子に横になつて体

を小さく丸めた。

「ディアンには記憶がない。少なくともこの館に来る以前のものは。

それからは長いこと外に出す本を読んできた。

この中に自分の記憶の手がかりがあると信じて、長いこと光にも当たりらずにただ読んでいた。

途中から話を解いていくのが趣味のよくなってしまつたが、自分の記憶のことが最優先なには変わりはない。

読んで、読んで、読み続けて一体どれだけの時が経つたのか。外の景色がわからない以上知る術はない。

ある日のことガチャンと窓ガラスが割れた音がした。そしてすこしへきいと館の扉を開く音。

気になつて音が鳴つた場所に行くと転がつていたボールと柔らかい髪を持つた少女。

自分と同じ種類の生き物がいる。

そのことにディアンは怯え、そして威嚇した。

「消える」

きえてしまえ、おれのまえから

それから全く訪問者などいなかつたこの館に毎日小さな影が現れるようになった。

小さな影はディアンにどんなに脅されても来ない日はなかつた。どんなに寒い日も、暑い日も足しげく通つてきた。

ディアンは慣れ合つもつはなかつた。興味を抱くつもりもなかつた。

少女がいすれいなくなつてもいいと思つていた。むしろいなくなれと思つていた。

でも

手の中の本を読み終わり、ディアンはおもむろに近くの本を漁つた。が田当ての本は見つからない。

さつきまでいた位置まで戻つてじつと本にまみれた床を見つめるが、そこにも本はなく、軽く眉間にしわを寄せるとふと長椅子で眠るコノを見た。その手には『けものにおける食物の由来』

ディアンはのこと長椅子の傍まで行き、だらつと弛緩したコノの腕から本を奪つてそのままそこでページをめくる。そして何かに気づいたようにコノの寝顔を見る。

目を閉じてすうすうと息をするその姿は安心しきつていてディアンは眉をひそめた。

ゆつくりとコノを起しきなこつに立ち上がると自分の寝室へ繋がる扉を開く。戻ってきた腕の中にあるのは毛布。

それをそろりとコノに掛けると自分はその横に座り、肌触りのいいコノのくるりと柔らかい髪を手の中で弄ぶ。

たまにこつしてコノの髪で遊んでいるのだ。休憩代わりにちょうど

いい、とディアンはそのまま長椅子に体を預ける。

そのままディアンは睡魔に襲われ、手の中の本がじてんと床に落ちた。

「ただいまかえりまシター。ディアンサン、待たせてすいませン！  
すぐ」はんにしますカラ・・・アレ？」

扉を開けたレオンは姿の見えないディアンに首を傾げた。いつもなら顔ぐらい合わせてくれるはずだ。

もしかして遅すぎて怒らせてしまつたか。レオンは焦つて室内を見まわした。

すると二人分の寝息が聞こえ、レオンは笑みをこぼした。

長椅子に丸まつて眠るコノにそれに寄りかかるディアン。

心底幸せそうな一人を起こすのは忍びなく、レオンは夕日の差し込む窓とカーテンを閉めるとそつと扉を閉じた。

コノの朝は忙しい。

朝早く起きて近くの共同の井戸から水を汲み、泡だらけにしながら洗濯をする太陽が昇る頃合いになる。洗濯ビニールを木々の間にかけて洗濯物を干すと家からいいにおいがしてくる。メアリが朝ごはんの準備をしているのだ。コノは洗濯物を入れていたコノの胴ほどもあるバスケットを持ち上げ、家の中に入つて行つた。

台所ではメアリが竈でことこととスープを煮込んでいた。竈の中では炎が勢よく燃えていて水の冷たさに慣れた手にはこたさが厳しい。今日のスープはコノの大好きなツラという白身魚が入つたものだ。パンに挟んで食べるとスープがパンにしみ込んでとても美味しいのだ。

もつすぐできるわよというメアリの言葉を受け、コノは双子を起こすために一階へ階段を駆け上つて行つた。

「ほら、シユリン起きなさい！ノリンも！」  
「うーやだー・・・こてえ！ねえちゃんのばかー」「むー・・・」

布団にしがみつくシユリンをベットからたたき落とし、眠い目をこするノリンには水差しから冷たい水を渡してやる。起きぬけに冷たい水はちょうどいい眠気覚ましになるのだ。んくんく、と喉を鳴らして水を飲むノリンを見て俺も飲むと騒ぐシユリン。

はいはいとまた水差しから水を注ぎ、シユリンに渡してやる。並んで水を飲む双子を急かし、一階の食堂へと降りていく。ここまできたらやっとユノは朝食にありつけるのだ。

「あ、ユノ、ちょっとお使い行ってほしいんだけど」

「いいけど、余分に買つてもいい? 隣に分けたくて」

食器を片づけているとメアリから買い物を頼まれたユノは急いでモノと財布をつかんでドアを開けた。

「お、ユノじやん。何? 買い物?」

「そう、いきなり母さんに頼まれちゃって。ここで最後なんだけどパン屋の看板娘ならぬ息子のミリスに声を掛けられたユノは苦笑して見せた。

二人の関係を表すのなら幼馴染とでも言おうか。とはいへ向こうの方が少々年上なのがまあそれも一年の差だ。

ふうんと気のない様子でもカウンターから出て必要なだけパンを取ってくれるのはユノにとつて有難かつた。

何しろ今腕は荷物でいっぱいでもパンを載せるトレーまで持ち上がりそうになかったからだ。

レオンを連れてくればよかつたと呟くユノの心の中を知らずミリスはふと話を変えた。

「そういうえば前連れてきてたあのなんか顔見えない奴・・・なんだつけ」

「ん? レオンのこと?」

思いかけず出てきたレオンの話題にユノはきょとんとさせた。そうそう、ミニリスが相槌を打つ。小さな声で犬?と呟かれたような気

がしたがユノは聞こえないふりをした。

「あんな奴いたっけ？見おぼえないんだけど。つていうかあの後からよくうちにくるんだけど」

「ああ、最近近所で暮らしが始めたの。あの時はちょっと道案内みたいなもので」

「嘘つけ。完全に荷物持ちだったり」

「・・・はい」

問い合わせるようにたたみかけるミリスの言葉にユノは肯定するしかなかつた。

へこたれずへへーと笑うユノにミリスははあとため息をつくとそれしさとカウンターに戻つてパンを袋に包み始める。

「はい。全部で2300ピレね」

「あ、ちょっとまつて」

わたわたと財布を取り出して銀貨2枚と銅貨3枚を取り出そうとしているユノ。それをミリスは行儀悪く類杖をついて見る。この時間客は少なく、ユノが多少もたついても問題はなかつた。

どうにか財布を手提げから引っ張り出して硬貨を出しているユノを見ていた緑色の目がふと後ろへと注がれる。

「あれ？そこにいんのノクス兄じやね？」

「へ？」

硬貨を渡してパンを抱えたユノが後ろを振り向くとガラス戸の向こうでノックしつつ笑つている青年が見えた。

短い栗色の髪を整え、灰白色の軍服を着て青い目を悪戯っぽく細めるその人は確かにメリクリス家の長男であり、ユノの兄でもあるノクス＝メリクリスだつた。



補足:

金貨 = 10000ペソ

銀貨 = 1000ペソ

銅貨 = 100ペソ

紙幣 = 1~999ペソ

とこののがこの国の貨幣事情です。

「ノクス兄さん！」

「おー元気だつたかユノー」

目を輝かせて手の中の荷物を気にせずノクスへと飛びつくユノ。そんなユノをノクスはくしゃりとした笑顔で軽々と抱き上げてしまう。パン屋の中での兄妹愛に出くわしミリスははあと息をついた。

「メリクリスのおー一人さん、仲がいいのはいいけれど出来るなら外でやつてくれない? つーかノクス兄でかい。商売の邪魔」「それは悪かつたなあ。ほら、ユノ出るぞーあ、荷物もつてやるから!」

「あ、うん。じゃあまた明日ね、ミリス」

「はいはいまたのおこしをおまちしておりますー」

さつやといけどばかりに手を振るミレスに追いやられ、ユノとノクスは店の外に出た。

ノクスはユノの荷物をすべて取り上げ、抱える。ユノが持つだけでも息が切れそうな大荷物はノクスにかかると何でもないようだった。軍服の下のたくましい腕が荷物に安定感をもたらし、荷物持ちにはもつてこいの人材だ。

ノクスがついているのは文官の地位だ。だがその体格、趣味でやつてている筋トレでついた筋肉のためそう思われないことが多い。ましてや男にしては細いレオンと比べれば本当に同じ年齢か、と疑いたくもなるだろう。

「ノクス兄さんなんか動物追つてるんじゃなかつたっけ？なんでここに？」

「あーそっそ、上司が鬼畜でな。地方を飛びまわされてついにここまで来たんだよ。寄つたついでに家族の顔でも見てみようかと。あと俺が探してるの動物じやないから」

「え？ でも探してるつて手紙に・・・」

「ああ、探してるのは間違いじやない」

首をかしげるユノにつかりと太陽のよつた笑顔を向けてノクスは言った。

「けものだよ」

「・・・けものつてあの？」

「そつ、あの童話にでてくる人になつた美しいけもの」

「・・・命令してるのつて誰だつけ

「第5皇子。つまり俺の上司」

「・・・この国つて大丈夫？」

「俺も不安に思う・・・いやでもちゃんと王族がけものを探すのは意味があるんだつて」

心なしか落ち込んだ声の会話は兄の国を弁明する言葉で遮られた。本当に？と田で訴える妹を田で本当にと答え、歩きながらノクスは理由を話そつと口を開いた。

「けものの話の最後の方知つてるか？」

「えーと王が欲のためけものから種を奪い、それだけものが嘆いて人の前に一度と姿を現わせないことを誓つて、王はその種のおかげで裕福になつて國も大きくなつたけどけものに会いたいからずつとさがしてゐる・・・んだっけ」

「そうそう、よく覚えてたな？」

「えへへー」

まさか隣人に嫌というほど読み聞かせられたなどといえない。感心したようにノクスはコノの頭をがしがしといきさか乱暴になで、荷物を持ち直した。

「つまりそういうこと」

「え？ そういうことって？」

「王様、王族が探してゐるから俺が探す。まあ所詮下つ端の方には情報なんてくるわけないよなー」

「んー・・・ノクス兄さん大変なんだね？」

「そうそう、まあなんか情報あつたらくれよ? つとついた」

ただいまーと久しぶりの我が家にノクスの声が明るく響く。久しぶりの家族の歓迎に家がいつも以上に騒がしくなる。コノも顔をほころばすとノクスの後に続いて家の扉をくぐつた。

昼食を食べた後。いつもこの時間からがコノの自由時間であり、館へ訪れる時間ともいえる。

食糧を持つてそのまま館に居座るのが常であるが、今日は久しぶり

の家族団らんとしゃれこみたかった。  
といふことで。

「ティアンー？ レオナー？ いるー？」

今日は部屋に入り込まず、玄関ホールで帰ろうと声を張り上げた。  
しばらくしてきこと本だけの部屋に続くドアが開けられ、出てきたのは埃まみれのティアンだった。

「めずらしきわね、ティアンが出てくるなんて」

「レオンは本屋を見てくるそうだ。ついでによさげな本があつたら  
買つてくれるよ」

「へえ」

そのままティアンがバスケットの中身を確認するのを手持ちぶさた  
に眺める。

ティアンがいつも薄暗いところにいるので、その髪や目の中色がはっ  
きり見えたことはない。

顔立ちはわかるのだが、それも薄暗闇の中でしか見たことがない。  
ティアンを外に出したいというのはティアンをはつきりみてみたい  
というユノの些細なわがままもあるのだ。

「これでいいの？」

「まあ明日またもつてきてくれれば嬉しいが……」

そういつてティアンがバスケットを閉めよつとしたその時、ぎさぎ  
とユノの後ろのドア・・・つまり館の入り口が空いた。外の光が館  
内に差し込み、ユノは目を細めた。

光を背負つよう人に人影が館の中に入つてくる。

「おい、ユノ？なんでお前こんなとこへ？・・・つておい」

人影はノクスだった。

隣にある幽靈屋敷に妹が行つたところを見て心配になつたのだろう。しかし今ノクスの目は信じられないものを見るように開かれていた。兄のそんな姿を今までユノは見たことがない。

誰をみてそんな顔をしているのだろう。ノクスの視線を追つていくと光を逃れてユノから距離を開けたディアンがいた。バスケットはその手になく、警戒心をあらわにして侵入者を見定めようとしている。

歩いて20歩がそこいらの距離。けどなぜかその距離が嫌に長く感じてユノは距離を縮めようとディアンに近づけたとした、が腕をつかまれて進むことができない。

誰だと振り向くといつにもまして真剣な顔をした兄がいた。そして確信を込めて口を開いた。

「・・・第3皇子殿下。行方不明のはずの貴方が何故このようなどころに？」

かつて皇子は5人いたのだと聞いたことがあった。

病弱だった第1皇子はまだ若いうちに病氣でなくなり、  
氣性の荒い第2皇子は王家のしがらみに嫌気が差して國を放浪中。  
幼くとも賢いと有名だった第3皇子は何者かに拐かされ、行方不明  
に。やがて亡くなつたとされた。

皇太子でもある第4皇子は日々王族としての職務を全うし、  
最後の第5皇子はその補佐として陰ながら支えているといつ。

それもこれも街に流れる小さな噂話。王族なんて日々の生活では税  
収以外あまり関係はなく、ユノは一生その姿さえも見ることはない  
と思っていた。

「・・・第3皇子？」

ディアンは警戒しながらも言葉を反芻した。  
ノクスはかしこまりつつ慎重に口を開く。

「そうではないとは言わせませんよ。見たのは一瞬でしたがその漆  
黒の目は王族、それも直系独特のもの。さらにその御姿から判断す  
ると10年前に拐された第3皇子のシラティウス殿下しかいらっ  
しゃいません。なにより」

ノクスの田がひたりとティアンを見据える。

「王宮に飾つてある幼いころの第3皇子の絵が成長した姿にそつくりです。これで別人はあり得ないと思われますが」

ユノはただわけも分からず茫然としているだけだった。兄は一体何を言つているのだろう。ティアンが皇子だなんてそんなことあるわけがないじゃないか。

妹の混乱をよそに兄はただただ言葉を紡ぐ。

「貴方が何故このような場所にいらっしゃるのか、生きていたなら何故今まで姿を現さなかつたのかは分かりません。ですがこのような場所よりも貴方にふさわしいところがあるでしょう。・・・王宮にお戻りいただけませんか、殿下」

ノクスの言葉にティアンはゆるりと動いた。

すたすたと跪くノクスと立ちすくむユノの近くまで来て落ちていたバスケットを拾つて中身を確認する。

何も異常はなかつたのか黙つたままパタンとバスケットのふたを閉じるティアンにしひれを切らせたのか、ノクスが身じろぎする。

「殿下」

「違う」

呼びかけるノクスに「ティアンは見もせずに否定した。

「俺は少なくともその殿下とやらじやない。ティアンだ  
・・・あくまでもそつおつしゃるのですね?」

ゆらりとノクスが立ちあがる。その様をティアンはただじつと見ていた。ユノは何をしたらいいか分からずおろおろと状況を見守る。

何とも言えない空氣のなか、ノクスはにやはつと破顔した。

「殿下じゃなくてただの一般市民ならもう敬語使う必要ないよなー？あーもうやだやだ敬語とか。10歳老けこんだ氣分になるよ全く。そもそも身分が上だつたら敬語つかえつてあれじやね？職権乱用じやね？どうせ言つてることは同じなんだからぱーつて言つちゃえれば楽なのになー」

「・・・ちょっとノクス兄さんそれはあんまりじやあ

あー肩こつたと首を回すノクスにユノが力なくつっこむ。そうだ、こういう人だつた、この人は。

さつきまでの緊迫とした空氣などお構いなしにティアンに話始めたノクスにユノはため息をつくと先に帰つてるね、と言葉を残して扉から出て行つた。

ユノが出て行つたことを確認するとノクスは改めてティアンに向き直つた。

「どうも、さつきはすみませんね。俺はノクスだ。『づりぐる』と思はけどユノの兄でね。まあ宜しく頼むよ」

そういうて差し出された手をしかしティアンは無視する。冷たいなーとノクスは苦笑し、手を降ろした。

「まあ冷たさなら俺の同僚も負けてないけどなー。ああでも向こうは少しぐらいかまつてくれるけど

「何の用だ」

くだらない雑談を始めようとするノクスの言葉を切り裂き、ディア  
ンが問う。

わざわざ妹をあきれさせ先に帰らせておいてまだ一人に残るのだから何があるのだ？

ノクスはああ、と頭を搔いてから本題を口に出す。

「こやあ俺ちよつとがしゃのしてこてね。最近じこでそれ関係の本ばかり買われているつて噂で聞いてまありょつと見せせてもらおうと」「うう

「そ、うなんだけど。え、つ本当にここの、の、か？け、もの、関、係の、本、つてた、く、さん、あ、つて、玉、石、混、合、だ、か、ら、集、め、づ、ら、い、ん、だけ、ど、」

驚いて目を丸くするノクスに、ティアンはちょっと待つてろと言つて

「じさじさと腕の中に落とされた本をぱらぱらとめくってノクスはカツヒ田を見開いた。

「ちよつとまでよ・・・」の本國立図書館にも置いてない奴・・・  
「」の資料も脱だいしては・・・・・・

「必要なものがあればいえ。持つてき  
この資料も見かこかい」

「あ、中には入らせてもらえないのね・・・」

ぎらりと眼光で凄まれてノクスはあははと乾いた声を出す。どうやら完全に警戒されているらしい。

「用がないならさつと帰れ。俺は暇じゃない」

「はいはい、また数日の後に来させてもらいます。あ、あと最後

「なんだ？」

外に出ようとしてふいに振り返ったノクスに「ディアンが答える。どうやらノクスがちゃんと出るのを見るまで動く気はないらしい。ノクスは肩をすくめてまあなんでもないんだけどさ、と前置きをして聞く。

「赤い目の人間、みなかつた？」

顔には笑顔が張り付けられているが青い目はディアンを捉え、その動作におかしいところがないか冷静に分析している。

ディアンはその目に動じずに見てない、と答えた。

実際館から外に出たことはあまりないのだから人間 자체ユノ、レオンを除けば見ていない。

ディアンにおかしなところがないと判断したのか、ノクスはそう、とそつけない言葉を返し、館から出て行つた・・・と思うとものすごい勢いで引き返した。

「ごめん、これがほんとのほんとに最後。ちょっときたいことがあるつす！」

「・・・わつわといえ」

うんざりしたようなディアンの言葉にノクスは先ほどと同じくらいの笑顔でディアンに聞く。

目は笑つてない。

「うちの妹とどういう関係？」

「・・・・・・・・・・」

ディアンは沈黙だけを返してパタンと館からノクスを閉めだしたのだった。



## まつりもの

「H、昨日ユノさんのお兄さんが来ていたんデスカ?」

レオンが驚いたように叫び。台所でレオンの手伝いをしていたユノはやうそう、と頷いた。

「今日はなんか部屋にこもって本読んでる。いい資料が見つかったんだって」

「へH・・・さすが王宮務メ。責任感あるんデスネエ」「いや、なんか『もうめんどくせー上司の鬼畜ー過労で倒れて一ヵ用ぐらいい病室に監禁されればいいのにー』っていってたよ」

その時の上皿を倒れさせいやうと計画を練るノクスの顔はとても楽しそうだった、とユノは語る。

ちょっと共感シマス、とレオンが叫び。

「仕事とか無性に休みたくなる時はありマスヨ。休憩が充分取れないとそう思つのも当然じゃないデスカ?」

「今日頃まで寝てたけど」

「アア・・・」

フォローの仕様がない、とレオンは肩をすくめる。ユノは皿を拭きつつレオンを見上げた。

「仕事とか・・・でレオン仕事してたの?」

「エ・・・ああ計算とかデスネ。そういえばそのお兄さんなんでけものを探しているんデスカ?」

ほほ笑むレオンの顔はどこかぎこちない。さつげなく話題を変えられたことにコノは気づいたが、何かあるのだろうと気づかなかつたふりをしてレオンの質問に答えようと口を開いた。

「んーと上司が探すから下つ端の俺が探すんだつていつてたよ  
「上司つて王子様デショ？下つ端つて感じじやないですかネエ」  
「大人の事情つてやつでしょ」

そうこうとコノはレオンに背を向けて拭き終わった食器を食器棚にしまって始めた。

レオンが何か言おうとして口をつぐんだ姿はコノからは見えない。

食器をしまつてしまつともつやぬことがなくなつてしまつた。

コノは手持ち無沙汰にかんがえ、ふと思いついてレオンを振り返つた。

レオンはいつも通りの笑顔でどうしたんデスカ？と問いかけてくる。

「今日つて何日だっけ」

「確かウーノの24日デス。けもの祭りまであと7日デスネ」

けもの祭りというのはトレー用の初めに行われる祭りで、けものが大干ばつだったこの国に雨を降らし、作物が大豊作になつたという伝説に基づいている。早い話が、収穫祭だ。

このとき國中が3日3晩盛り上がる。祭りらしい祭りのないこの國の唯一國が上げて祝う行事だ。

「え？ もうそんな時期？ ジヤあティアンの誕生日もあと7日じゃな

い

「ティアンさんつて誕生日あつたんデスカ？」

レオンが首を傾げる。コノは財布の中身を確認しながら答える。『さりげり予算には足りそうだ。』

「うん。いくら聞いても答えてくれないから私が勝手につけたの。私が館にボール放りこんでディアンに『消える』って言われた日よ『素直に初めて会った日だつていいマショウヨ・・・』

レオンが呆れたように呟つ。そして自分の財布を手に取つた。

「俺もディアンさんにはお世話になつてますカラネ。一緒に贈り物を選びマショウ」

コノは嬉しそうにうん、と勢いよく答えた。

「あれ?ノクス兄さんもう飽きたのかな」

メリクリス家の前を通ると双子のはしゃいでいる声がよく聞こえた。双子を追いかけまわしているであろうノクスの声も。

「ねえ、ちょうどいいから会つていく?」

「ンー・・・やめておきマス。嫌な予感がするンデ」

てっきり肯定的な返事がくるとおもつていたコノは目をぱちくりとさせた。レオンはそんなコノのことを気にせずわやかな笑顔であ行きマショウとコノを急かした。

昨日のことをディアンから簡潔ながら聞いていたレオンはシスコンの鋭い目を向けられてはかなないと足取りはこさか早くメリク

リス家の前を通りすぎたのだった。

通りはもつ祭りの準備にはいつているところがあるのか、とんかんとあちこちから金槌の音が聞こえてきた。

ユノはいろんな店をめぐったが、これとこつものではなく、少々落ち込んでしまった。

レオンに聞いてみるともうすでに買つたりじい。見せて、とねだるとダメとユノが届かない位置まで包みを持ち上げられてしまう。

意地悪、と頬を膨らませたユノを見るレオンは心底楽しそうで、ユノは完全にへそを曲げてしまった。

もう二度とわざとレオンを振り払つと自分は複雑な路地裏を闇雲に進んでいく。

わき目も振らずにすんずんと気が向くままこつちを曲がりあつちを曲がり。

気づいたらユノは見たことのない場所まで来てしまっていたのだった。

まつりもの（後書き）

補足 月  
ウーノ 四月 トレー 五月 トレス 六月 セウロ 七月 ミリ  
ス 八月 メリ 九月 ビス 十月 チヨネ  
十一月 レーレ 一月 ユウセ 二月  
十一月 ヴェイネ

ユノが住んでいる街は首都から程よく近く、けれどさほど都会ではない割にそれなりに大きく、そこそこ人通りもある。しかし大きな街ゆえに長年住んでいるユノにも把握できていない場所が多い。

例えば裏通りとか。

「…………」

斜陽の刺す狭い道でユノは途方に暮れて呟いた。

人はいるにはいるが、みな俯いて早足でユノの横を通り過ぎてしまふ。話しかけようとしても軽くかわされてしまうのだから自分で道を探すしかない。

しかし進めば進むほど道は複雑になつていき、最後には袋小路にたどり着いてしまった。

日が落ちようとしている。

レオンは焦つて自分を探しているだらつ。それとも怒つて帰つてしまつたか。

それにそろそろ家に帰らなくては家族が心配する。兄も心配性だから遅くなると怒られるだらう。大好きな兄に怒られるのはできれば避けたかった。

息について引き返し、最初の曲がり角を曲がり切った瞬間田の前にぬつと黒い壁が現れた。

どうにかぶつかる直前でコノは身を翻し、鼻に打撃を『えりれずにはすんだ。

既視感を感じて見上げると深いフードを被り、口元も黒い布で隠された人間がコノをフードの奥から見ていた。

その背の高さから男性だといふことが分かる。体系的にはティアンとどつこどつこいだ。

フードの男は首を傾げ、布に阻まれてくぐもった低い声で呟いた。

「子どもがなんでこんなとこに…・・・？ああ、迷子か」

「迷子じゃないですーちょっと走つてたら道がわからなくなつたんですねー」

「それを迷子と言わずになんと言つんだ」

迷子という言葉に反応してコノは唇を尖らせた。自分でも迷子だとわかつていただが、気づきたくなかったのだ。14歳にもなつて迷子だなんて！

さらにコノは何か言おうと口を開いたが、はつとした。

フードを被つたどう見ても怪しい男と話している場合じゃない。早く見知った場所にでてレオンに謝らなければ。

フードの横を通り行こうとすると呼び止められて腕を掴まれる。そしては人攫いだったか。コノは一気に顔を青くさせた。

「なんだその顔。傷つぐじゃないか」

フードはため息をつくと腰を屈めてコノと視線を合わせた。そしてぱつとコノの腕を離すと両手をあげて自分がコノに何か害する気はないことを表明した。そのうえで真剣にコノに話しかける。

「いいか？ここは夜になると極端に治安が悪くなる。たまたま居合わせたのが俺だったからいいが、次に会うのが人攫いじゃないとも限らんぞ。変態もよくてるしな」

「う・・・仕方ないじゃない、道がわからないんだもの」

ユノはフードが何もしてこないことに安堵してその話の内容に不安げに服を握った。

フードはにやりと笑い、悪戯気に提案する。

「そこでだ、俺が道を教えてやる。俺がいれば変なやつも寄つてこないだろ？。どうだ？」

「本当？」

「本当だ」

フードに頷かれてユノは疑わしそうな顔をする。優しくされてもフードには何のメリットもない。

美味しい話には裏がある。安い野菜だってワケがあつて安いのだ。たとえは少々おかしいかも知れないが。

フードはそのかわり、と前置きをした。それきた、とユノは身を固くさせる。

「ちょっとお使いを頼みたい・・・いや、簡単なものなんだが」

「何？」

「女物のアクセサリーを買つてきて欲しいんだ。知り合いにあげなくちゃいけないんだが、俺には何かなんだか分からなくてな・・・。それに装飾店は俺には居心地が悪い」

「そんなのでいいの？」

ユノは呆気にとられた。簡単ではあるが確かにフードでは難しいだろ？。

その背の高さでは店の天井に頭をぶつけてしまいそうだ。

頼むよ、と軽く併んで見せるフードにコノは了解の返事を返した。

ひょいひょいと進むフードの端をコノはしっかりと握りながら道を進んでいた。

フードはコノの歩幅を考えてゆっくりとは進んでくれているようだが、それでもコノには十分早く、これまで駆け足で歩かなければいけなかつた。

「そういえばそのアクセサリーをあげる女人の人ってどんな人なの？それがわからなかつたらアクセサリーを選ぼうにも分からぬわよ」「そうだなあ・・・好きな色は赤っぽいやつな。そしてじゅらじゅらした奴が嫌いらしい。シンプルなやつを頼む」

歩きながら話すフードの声は弾んでいて、その女人の人のことを探ましく思つてゐることが伝わつた。

コノはふむふむと頷き、じゃあ、とせらに突つ込んだ質問をした。

「そのアクセサリーとおそれいのものは必要？」

ぶつつと何かを吹きだした音がして、フードが急停止した。急に止まつたフードの背中にコノは顔面から突つ込み強かに鼻を打つた。いつたいと涙目になるコノにフードは振り返つて噛みついた。

「おま・・・なんこというんだ・・・！」

「だつてアクセサリーはおそれいのものを持つた方がそれぞれの身を守るお守りになるつて・・・」

本に書いてあつた。

ユノがそう言おうとする軽く頭をはたかれる。痛さが倍になつた。  
「馬鹿。首都ではおそらくこのアクセサリー付けてると恋人もしくはそれ以上としてみなされるつてことさ……ああ、子どもだから知らないか」

「子どもって……これでも一四歳なんですからねー。」「充分子どもだ。ああくそ……」

フードは顔を手で覆つとせつと行つて来いと近くの装飾店を指差す。

気づけばユノの見知った場所に出ていて、指差された装飾店も何度も通りたことがある。美しいものばかりと有名な場所だ。

ユノは素直にフードの財布を受け取り、店の中に入つて行つた。

選んだアクセサリーは赤い宝石のついただけの銀細工のネックレスだ。

金貨が20枚ほどフードの財布から消えて行つたが、それなりの品だから問題はないだろう。

アクセサリーを受け取つて店を出るとフードが店の横の小さな路地でこつちだと手招きをしていた。

ユノが近づいてアクセサリーと財布を返す。

フードが袋の中のアクセサリーを確かめるのをじきじきしながら眺める。

「どう? 金貨20枚以上しあげたんだけど」

「ん。これならあいつも満足すると思つた。センスあるなあ。金なら無駄にあるから心配すんな」

そういうでコノの頭をぽん、と軽く撫でる。褒められたとコノはすぐついたい気持ちになった。

「いらっしゃで大丈夫か？」

「うん。あとは道に沿つて行くだけだから」

心配してこるようになつたフードにコノは大きく頷いて見せた。それからここまで送つてくれてありがとうござこます、と丁寧に頭を下げた。

フードはお互いままだと苦笑した。

そうなのか、とコノが軽く首をかしげているとコノサン！と聞きなれた声がしてコノは思わず後ろを振り返つた。

「よかつたな。迎えが来たみたいだぞ、コノサン」

「コノです」

「そうか」

最後にフードは軽くフードをあげてコノと視線を合わせて笑つた。

「じゃあ、また会つときにな、コノ」

そういうとフードは路地の中に消えていった。

「コノサン！ああもう心配したんですカラネ！一人で勝手にどこかへ行かないでくだサイ！何かあつたらどうするんデスカ！」

「うん・・・」

ぶりぶりと怒るレオンにコノは生返事を返す。さつき見たものの衝撃がまだおさまらない。

「・・・？コノサン？聞いてマスカ？あ、大丈夫デシタカ？何か変なことがあつたりトカ・・・」

「ここまで送つてくれた人がいたから大丈夫」

「そうデスカ・・・その人はドコニ？お礼を言わなくテハ・・・」

「もう行つちゃつた。ちゃんとお礼を言つたから大丈夫よ、それより早く帰らないとノクス兄さんに怒られちゃう」

「そうデスネ。ディアンさんもお腹を空かせているでしょ」

ああ、そうだ、贈り物は買えましたか？と問うレオンにコノは黙つて頭を振つた。

そうデスカ、とレオンはコノの手をつかむ。もう離れちゃいけませんカラネ、と微笑むレオンにコノもぎこちなく笑みをかえす。

フードの男は漆黒の目を持つていた。

兄に聞いたら何か知つているだろ？ とコノは考えつつもなぜか秘密でいたくてこつそりと胸の奥にしまつた。

## はたらきもの

迷子になつた次の日、またユノは街へと繰り出した。祭りまで一週間を切つたところとあたりは準備でにぎわつてゐる。

今度は裏通りには近づくことはせずに表の店だけ見て回つたが、特にディアンの誕生日の贈り物として通用しそうなものは見つからなかつた。

そもそも一日中館に引きこもり、外にも出ないから服もいらない、装飾品にも興味のないディアンのような男にふさわしい贈り物はなんなんだろう。

ユノはうーんと唸つてから来た道を戻り始めた。わからないのなら本人をよく観察して欲しがつていてるのを察するべきだ。

とことこと通りを進んでいくとこのまえ勝手に進んだ裏通りへの入り口が見えた。

気になつてちょっとだけ覗いてみる。裏通りはしんとしていて人通りが少ない。我ながらよくこんなところを闇雲にすすめたものだ。ユノはしばらく裏通りを眺めていたが、首を振つてまた通りを進み始める。

フードにまた会えるかもしれないという淡い期待はあつた。けれど会えないだらうという妙な確信もあつた。

「会えたなら聞いてみたいことがあつたんだけど・・・いつか会えたときでいいよね」

ユノは呟くとディアンを観察しに館へと戻つて行つた。

館へ戻ると何やら騒がしい。

レオンがディアンと議論している時のような騒々しさではなく、コノは首を傾げて扉を開けた・・・とたんにげんなりとした。

「ノクス兄さん・・・なにやつてゐるの・・・」

「おおーコノかーちよつと聞いてくれよー」おにーさんが宝の部屋へ案内してくれないんだよー」

「何故お前を俺の部屋にあげなくちゃいけないんだ?」

ノクスが本を返して新しい本を借りようと館に押し掛けたらしく、無邪気にコノに助けを求めるノクスにいらいらと言葉を返すディアン。一方的に敵意が向けられているが、向けられている相手はへらへらとそれらを笑顔でかわしている。かわされたディアンはその態度にまたイライラを募らせ・・・ビーブ見ても悪循環だ。できれば近寄りたくない。

そんな妹の心境を知つてか知らなくてかノクスは口をどがらせてディアンに向き直る。

「もー冷たいこと言つちやつてをー、やつぱ自分の田で選んだほうが効率いいじやん?まあぶつちやけ他にじんなお宝本を隠しもつてるか知りたいわけなんだけど」

そこでノクスは言葉を切つてすいと田を細くする。

「何?俺をそんなに入れたくないってことば俺に見せられないやばい本とか置いてあんの?」

「やばい本とは何だ?」

「そりやあやつぱりい?国がさすがにやばいって発禁食らわしたあつはんなやつとか?うつふんなやつとか?やだ俺も見てみたいそれ。一人占めはするーー」

悶える兄に妹は冷めた目を返し、同じように呆れた目をしたディア  
ンにレオンはどう?と聞いた。

「レオンなら奥の部屋でいろいろ本を漁つてたぞ」

「んーじゃあそっちいこうかな」

「レオン? なにこの館犬いるの? 家でもいつてたけど」

ありがとう、と返事を返したユノに復活したノクスが聞いてくる。  
そういうえばノクスはまだレオンに会ったことはない。いずれ会うな  
ら今紹介したほうがいいか、ああでも本人は会いたくない的なこと  
を言つてたような、とユノが悩んでいるときにディアンがノクスに  
頷いた。

「便利な犬だ」

「ええーいいなー俺動物すつごい好きなんだよね。軍犬とかさ、超  
かつこいいから餌付けさせて手なづけてたんだけど軍長にバレてめ  
つちや怒られてさー。犬に癒し求めてもいいじゃんつて思うんだけど  
ど軍長頭固くつてさー」

「あの・・・ディアン・・・その言い方は誤解を招えると思つんだけど」

ディアンにだけ突っ込むユノ。ノクスの言葉には深く突っ込んでは  
いけない気がしたのだ。一文官でしかないノクスが国のそこそこの  
戦力を誇る軍犬を勝手に手なづけてしまうなどまさか。冗談だろう。  
え、犬じゃないのか? と首を傾げるノクスにユノはううん、と首を  
振った。

「結構前にそこらへんでボロボロになつて倒れてたのを家で看病し  
たの。今はディアンのとこに居候してるけど。あ、そうそう、ノク

ス兄さんと同じ年よ

「つまじで！？」

ノクスが嬉しそうな顔をする。身の回りに同じ年はあまりいなくてつまらないと前に零していたことを知っているコノは兄に喜ばせることができると少し照れくさくなつた。

おおじやあ会いにいこう、とコノを連れて部屋の中へ入る。ノクスをむんずとディアンが掴む。

「いいじゃないか、少しごらい入つたつて。減るもんはないだろ？」

「お前を中に入れたら本が数冊無くなつてそうでな・・・」

「・・・ベツニヒトサマノモノトツタリシナイヨ？」

明らかに田を泳がせながらの言葉にディアンは眉を吊り上げいつかのようにぼいとノクスを館の外に頬り投げた。

いってえ！と喚く声は聞かなかつたふりでさつやとディアンは部屋へと戻つてしまつ。

コノはしじうがない、と肩を竦めてディアンの後に続いた。

「あーくそ、ガードかつたいなあ

外に放り出されたノクスは痛む尻を抱えながら自室へと戻つていた。ベッドにつつ伏せになつて日の柔らかな香りを吸い込む。

警戒心の強い館の住人はまだノクスを認めるつもりはないらしい。

下手にちょっとかいを出したら今よりも悪化しそうで彼と接している間、実はひやひやものだ。

そこまで食い下がつても彼の情報量には目を見張るものがある。先日見せてもらったものなどどのくらいの価値があるのだろうか。専門家に見せたら垂涎ものだらう。ざつと読んだノクスでさえ貴重なものだと理解したぐらいなのだから。

何にせよ、けものを探すという使命にはあの館の資料が大いに役に立つ。それを読むためにはあの警戒心の高い獣を懐柔しなければならない。妹にはそこそこ懐いているようだが、可愛い妹を利用するする真似はしたくないし、しないつもりだ。

「コノに手を出したら殴るけどなー」

ぼそりと独り言をつぶやくとノクスはよいせと身を起こす。痛みが幾分か緩和された尻を撫で、椅子に座つて机に向かう。机に置いてあるのはインクとペンと嫌にぼろぼろな紙だ。あちこちシミがついていて普通なら再利用されてもおかしくない状態のそれは風に舞い上がられないように本で抑えられていた。

ノクスは本をどかすとペンにインクをつけて紙に何やら書き込む。書き込んだ文字はインクが乾いていくと同時にすうと紙に溶け込んで消えた。

しばらく時間がたつと今度は何もしていないのに文字が勝手に現れ、端からゅっくりと溶けていく。

溶けていく文字を目で追つてノクスはため息をついた。ペンを手に取るとカリカリと走らせ、文字が現れるのを待つことなくまたものように本を置く。

そして両腕を頭の後ろに組んで背もたれに体重を掛けた。その姿は

まるで勉強に飽きた学生そのものだ。

「あー早く休暇もらえねーかなー」

ノクスの一人じりじりする声は部屋に響いてやがて消えた。

コノはじこつとティアソを見つめる。その姿は猫じやらしきじやれつく前の猫と似ていて真剣だ。彼女に尻尾があつたらピンと立てて高くしてこることだらう。猫じやらしの方はどうば居心地が悪そつに身じろぎはあるが手の中の本に夢中のようだ。

こゝ数日、そんな光景が館のあちこちで見られている。ティアソが別の場所にいこゝとするとまるで擦り込みされた小鳥のようにコノがあちこちひまぐるしくて回るのだ。

ほほえましいじやないか。レオンは笑い出しそうになるのを抑える。おおよそのところ、ティアソへの贈り物をまだ考へ付かないコノが焦つてきていのるだらう。普段の彼女にはないほほびティアソに積極的だ。

しかしティアソはといえばどこか浮かない顔。なぜこんなにもコノが自分に興味を持つているか分からぬ……といった様子でコノの気配を探つていることがよくわかる。

それぞれの事情をわかつているからコノヤレオンは口元をふにやりと緩ませた。

傍観者とはいひに楽しいものなのだらう。けれどこつまでも見続けることは不可能だ。

レオンは一人にこ飯ができるマシタヨ、と呼びかける。

「あ、はあい・・・ほほびティアソもちやんと食べなさいよ」

「こゝの考察が終わるまで・・・先に食つてていい」

「ティアソ！」

「コノサン、ティアンさんはちゃんと食べると言つてこるのテスシ、先に食べてしまいまショウ。前みたいに食べないといつことはないのですカラ」

「う・・・

「ほり、せりせりとこけ。お前がいると饭が散る」

いきり立つコノをレオンがなだめる。ティアンもそう言つてこるのだから・・・とコノはしぶしぶ席について食べ物に祈つをせざつと食べ始める。

今日のメニューはレオンお手製のスープに焼かれた魚、そしてミックスの店のパンだ。

あつせりとした味なのに出汁はちゃんとでている。ビリヤン今日のスープは海鮮物から出汁を取つたりじい。微かに混じる塩が良いアクセントになつてゐる。

そのスープを行儀よくスプーンですくつて口元に運ぶコノだが、目はティアンに固定されたままだ。いつまでたつてもティアンから目を離さうとしないコノにレオンは顔を険しくした。

「コノサン！お行儀が悪いデスヨ？それにティアンさんもそんなに見られたら落ち着かないデショウ？」

「はい」

めつと幼子にするよつてモるレオンに首をひかひませて了承するコノ。ティアンも心なしか視線が外れてほつとしたようだ。強張らせていた肩をほぐし、首に手をまわしている。でもね、とコノが言い訳をするよつて口をどがりせる。

「しょうがないでしょ、祭りまであと三日……さすがの私も焦るわよ。家に帰つたらノクス兄さんがつるさいから考へに没頭できないし……」

「だからとこつて贈り物をするティアンちゃんに負担を掛けてどうするんデスカ。あのひと、このあいだからコノはビーハしたんだと聞いてくるのデスヨ?」

「そんなこと聞いてくるの、ティアン」

「あとはコノさんの兄だと主張するつるやこ男が来たら知らせる用二ード。……俺のいない間にノクスさんとティアンさんの間に何か確執があつたのデスカ?」

「……兄さんつたら……」

はあ、とため息をつくコノを心配そうにみるレオン。あまりの兄の嫌われつぶりに馬鹿馬鹿しさを感じたコノは説明もせず、ちょっととね、と言葉を濁した。それより、とコノは小声でレオンに問う。

「どうしよう……ティアンの贈り物。考へても考へかないのよ」

「俺に言われてもあれですかケド……そうデスネ、本ハ?」

「腐るほどあるのにさらに増やしてどうするのよ。それに本つて高いのよ。金貨が取られちゃうんだから」

「エー……じゃあアクセサリー、トカハ……?」

「あの男が興味ありそうに見える?」

「見えまセンネ、ハイ」

はあと二人揃つてため息をつく。器はもう空になつてはいるが、お代わりをするほどお腹もすいていない。レオンがうーんと唸る。

「俺の場合ぱぱっと決めちやつたけれど難しいデスネエ……いつそのことティアンさんが一緒に店見て決めてくれればいいんデスケ

「ド

「外出てくれたなら苦労しないわ……夜だつたひ玉ねりとせ玉ねり  
ど夜にやつてゐる店なんて酒場とかそのへんよ。なんの解決にもなつ  
てない……ん？」

ふと何かに思い当つたようにコノがぴたりと動きを止める。そのま  
まゆつくつとティアンをみてふつん、とにやりと笑つた。

「決めた！」

「ウワ、びつくりシタ・・・良い案が出まシタカ？」

「ええ！これならぴつたり！レオンのおかげよ！」

いきなり勢いよく立ちあがつたコノにレオンはそれは良カッタ、と  
返した。

そのまますたすたと出口へ出るコノを見送る。

「これから作業に入らなきや・・・時間足りるかしら？あ、『あん、  
レオン、私祭りの日まで』には来ないわ！」

「それはいいですケド・・・何を思いついたんティス？教えてくだサ  
イヨ」

首を傾げるレオンにコノは心底楽しそうに口元に指を立てた。

「秘密！じゃあね、レオン！」

「ハハ・・・そうですヨネ、ハイ、また3日後――・・・」

玄関ホールで手を振つたレオンはふと後ろに立つた氣配にびくつと  
した。

いつの間にやら、レオンに覆いかぶさるよつてティアンが立つてい  
たのだ。氣配を感じなかつたと心臓をばくばくさせるレオンなど氣

にもしていな様子でティアンはユノが出て言つた扉を一瞥してはあ、と息をつく。

「・・・今日は早めに帰つたな」

「エエ、なんでもやる」とあるソウル。それとあと3日間は来れないよウテスヨ」

ユノと話していくことを聞かれたかとレオンは内心ひやひやしながら答えた。

ティアンはふうん、と興味なさそうに頷くとさわせと部屋の中へ戻つてしまつ。何をしに来たんだろう、とレオンは首を傾げた。その矢先にティアンが振り向いてレオンはぞきりとした。

玄関ホールにも窓はある。そこから差し込んだ午後の明るい光が照らしだした館内は程よく明るい。

反射する光にほの暗く照らされたティアンはまるで手負いの肉食動物のようだ。あたりを警戒する鋭い目の中の色は漆黒。

（ん・・・？いや・・・？）

レオンは目を閉じて頭を振つた。鋭い視線に射抜かれた体はまだちよつと震えている。

ティアンがたまに見せるこの目はユノがいるときに見られることがない。

たぶん無意識なのだろう、震えるレオンを困つたように見たティアンはレオンに近寄つてくる。慌ててレオンは何でもないようなふりをしてなにか話題を提供しようと頭を回転させた。

「ア・・・ああやついえば今日はノクスさん来ないですネエ」

「・・・・・・・・・・・・

ぴたりとティアンの足取りがとまり、眉間にこれでもかとしわを寄

せる。もともとの鋭い顔つきもあつてか、ものすごい形相になる。子どもがこれをみたら一目散に泣いて逃げるだろ？  
そんなにノクスが嫌いか。

「ディアンサン……顔がすごいことになつてマス……」

「……ほつとけ。あいつがきたら真っ先に俺に言え。お前に任せたら簡単に部屋に入れられそうだ」

「ハア……」

ぶつぶつと口の中で何か言いながらまた部屋へと戻りだすディアン。もつさつきの肉食獣のような目はしていない。レオンはほつとした。

「ああ、そうだ」

「へ？」

「あいつは赤い目の人間を探していると言つていた。知つてるか」「…………イエ？ そんな人間いるんデスカ？」

問われた言葉にすこし間をおいてレオンは応えた。口元にはふにやりといつもの笑みが浮かんでいる。

そうか、とディアンは応えてそのまま何も言わない。納得したようだ。

「赤い目の人間、ねえ」

レオンは咳くと台所に向かう。

その口元はさつきのよくなふにやりとした笑顔ではなく、への字に歪められていた。

## おかしもの

祭りが始まる夕方近くになつてコノは館の門をくぐつた。  
ディアンにあげる贈り物はこの日のために取つておいた綺麗な袋に  
いれてある。

「喜んでくれるかな・・・」

ちらり、と袋をみやるコノ。不安になるが、3日かけた自信作だ。  
無理やりにでも渡すつもりだった。

夜には家に帰らなければならないが、祭りといつこともあつていつ  
もよりは遅くとも叱られることはない。

今頃家では豪華な食事の準備でメアリが大忙しだろう。今日は館で  
食べると言つてあるのでコノの分は無いだろうが、明日がある。  
ディアンの誕生日は今日しかないのだ。

「レオン？ ディアン？」

「ア、コノサン？ 来たんデスカ？」

3日ぶりになる扉を開けると台所のほうからレオンの声が聞こえた。  
今日食べる料理を作つていてのんだろうと納得してコノは台所のほう  
に足を向けた。

「レオン久しぶりー 何作つてるの？」

「コノさん3日ぶりデス。今日のこ飯作つてるんデスヨー」

本を片手に鍋をかきまぜるレオンの姿は大変にあつていてコノはく  
すりと笑つた。

レオンは竈の火を小さくすると改めてユノに向き直った。

「贈り物は持ツテ・・・つてそれデスカ、ユノさんの贈り物ハ」

「そうそう、2日徹夜しちやつた」

ユノは手に持つた袋を持つててへど「まかすように笑う。レオンもつられたようにへらりとして徹夜はいけまセンガ、まあしじょうがないデスネ、ヒユノの頭を軽くなだた。

ユノは照れくさく感じてレオンの手をどけると鍋の中を覗き込む。

「これなあに？見たこと無いけど・・・」

「ディアンさんが見つけた本の中に昔けものが好んで食べたモノ、みたいなレシピがあつたのでそれを再現してみたんデス。ちょうどけもの祭りですシネ」

「ふーん」

「昔はそんなに肉を食べなかつたみたいデスネ、魚料理が中心デ。このことからけものは海岸沿いに住んでいたのではないかと朝からディアンさんと議論してバカリデ・・・」

「ああ、はいはい」

拳を握つての熱烈な話をユノは軽くいなしてテーブルの上に置いてあつた菓子に目を止めた。

「レオンーこれは？」

「ヒディアンさんが言うのデスガ、俺の言い分ではけものは森の中に暮らしていくことが多いと思ったのデスヨ。なにしろもともとは人間を避けて暮らしていたわけですカラ。なので木の実なども食したのではないかと思ったのデスガ、ディアンさんに森の中では肉を食べなければ栄養は取レナイといわれマシテ・・・」

「あーはいはい」

レオンは取り込み中の様だ。

まだ続くレオンの話を聞かずにコノは勝手にその菓子を口の中に入れた。

さくっとした歯触りにふわりと香るナッシュの香り。ほのかな甘みが口の中に広がつてすぐに唾液に溶けて消えていく。

おいしい。

コノはもう一つ、とその名もない菓子に手を伸ばした。

「おいしい、これ。レオンが作ったの？」

「・・・コノサン、話聞いてマシタカ？」

「ううん、全然」

「・・・」

「それよつこれー」

うなだれるレオンの口元にコノは菓子を近づけた。無意識なのか、そのままレオンはコノの手から菓子を口に含み、ああこれデスカ、と頭を振った。

「これは俺がつくれたんじゃないデスヨ。『ティアンさんデス』

「・・・ええー！？『ティアンが！？』とこいつ料理できたの！？」

「いやそこまで驚かなくてモ・・・下手すると俺よりも手先は器用デスヨ、ティアンサン。何しろ壊れた本の修正を軽く行うほどなのですカラ」

といわれても。あの大きな団体でこんな繊細な菓子を作れるとはいささか信じ難かった。

コノは手に菓子を持って本の中に埋もれたティアンの背中へ飛び込んだ。

赤い本を開いていたディアンは後ろからの衝撃に前につんのめりはしなかつたものの首を曲げて迷惑そうにユノを見やつた。

「ディアン！ ねえこれつくつたつて本当！ ！？」

「・・・・・うるさい重い降りる」

「重いつて！ それは失礼なんじやない？」

「なら言いがえる。お前の体重が俺にかかるつていて負担になつてゐる降りる」

ディアンに言われしぶしぶ背中から降りたユノは改めてディアンの前に菓子を突きつけた。

ディアンはそれをみてまた視線を本に戻してそうだが、と答えた。

「・・・本当に？」

「俺が菓子を作つて何が悪い」

「だつて・・・」

今まで知らなかつたし、とぶつぶつといつユノ。ディアンは不思議そうな顔をする。

「今まで作つてなかつたんだから当たり前だらう  
「そうだけど・・・」

ふうと頬を膨らますユノにどう接すればわからないといつた風情のディアン。レオンはその様子をこいつそりにやにやと見つめている。ユノはなんだか悔しいのだ。今までずっとディアンの傍にいたのに自分が知らないことがまだあつたことが。けれどそれはディアンに当たることではない。だから自分の中で消化しようとしているのだが、ディアンにしてみればその様子がふてくされているようにしか見えない。何が気に食わないのかわからないのだ。

傍田にはじつしりと少女の前で落ち着いているように見えるティア。けれど内面はひどく焦っているのが目に見える。レオンはほほえましくその様子を見守っている。ティアンに助け舟を出そうとう考えは全くない。

ティアンの右手が本から離れ、レオンは心中で歓声を上げる。さあ、その手をどうする?ふくらと膨らんだ頬に当てるのかさては抱きしめるのか。

右手が上がり、ふと下ろされた。その先には握りこまれたコノのティアンより小さな手。

手を繋ぐのか、その発想はなかつたとレオンが考えていたその時コノの手に当たられたティアンの右手がまた上昇を始め、コノの小さな口元を覆つた。

「むぐ・・・」

「いいから食え。言えばいつでもつくれてやるから」

どうやらコノの手に掴まれたままの菓子を取り、口の中に押し込んだだけらしい。レオンはなーんだとほつとした。

・・・ほつと..

口の中に菓子を入れられたコノはといつと不服そうに頷いていた。機嫌は治つたようだ、とティアンは安堵し、また本に集中を戻しながら長椅子の方に移動していった。

その場に残されたのは部屋の入り口でつーんと何か悩んでいる風のレオンと口の中の菓子がなくなり、台所に置いていた袋を取りに行こうとしてレオンを見つけ首を傾げたコノだった。



## しょくじもの

「大丈夫？なんか悩んでるんだつたら相談に乗るよ？」

「・・・イイ工、何でもありませンヨ。ソ、それよりも誕生会の準備をシナイト・・・といつてもあとはテーブルに並べるだけなのですガネ」

そういうながら慌てたように台所に引っ込むレオンにユノは不信感をつのらせた。

レオンは人がいい。何か悩んでいるようなら一人でため込まずに相談に乗らせてほしかったのだが、本人が拒否するのなら仕方ない。ユノはレオンが何か言いたげなようだつたら改めて相談に乗ることにして今は準備、とばかりに張り切つてレオンにあとに続いた。

テーブルに並べられた料理は魚中心のものが多く、またディアンに合わせたのだろう、肉料理は全くと言っていいほどなかつた。

ユノ達が住む街は海からもまた山からも近いという食物に恵まれた地形にある。・・・近いとはいえ海からは馬車で2日、山へは3日かかるのだが、比較的近い方だとは言えるだろう。

海からは海路を通じて様々な場所から物が運ばれ、山を通つて首都へ送られる。首都は山を一つ越えた先にあるのだ。

海から運ばれてきた魚は氷漬けにされ、店先に並ぶ。鮮度も申し分はないからレオンにとつては腕の振るいがいがあるというものだろう。

「ディアンー できたよー」

「また、今いく

コノの急いでいる声を聞いてディアンは開いていた本をパタリと閉じた。

いかにディアンといえど自分のために開かれたものに無視はできないといふことか。ただ単にけものの好物に惹かれただけのようにも思えるが。

いそいそと席に着くディアン。心なしか嬉しそうだ。みんな席に着いてからそれぞれ祈りをささげ、食べ始める。

「あ、これおいしー」

「それはカツレの実というのがわからなかつたんで別のものを変わりにしてみたんデス。カツレの実は香辛料のようだつたので他の奴を入れてみたんデスガ・・・辛すぎまセンカ?」

「ううん。ピリつてきておいしいよ、これ」

「それはよかつたデス。ディアンさんハ・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

「ものすごい勢いで食べてマスネ・・・」

「私こんなに食べるディアンはじめて見た・・・」

「・・・まあ初めて作った料理がディアンさんの口に合つたようでなによりデス」

「ていうか早く食べないとディアンに全部食べられちゃうよ・・・」

それからはみんなして無言で食器を鳴らす音だけが響き、じぱらぐくするどテーブルに埋め尽くされた料理はことじとく空になつていた。レオンはそれらの食器をいそいそと片付けをしつつフフフと楽しそうに笑みを浮かべた。コノも井戸からくみ上げた水を持つてやあと泡を流す。

「食べましたネエ・・・あれほど喜んでくれるとは予想外デス」

「ねえ、ティアンまた部屋に戻っちゃったけどどうする？贈り物」「とりあえずお茶を持って行つたときでいいんじゃないでシヨウカ」「やうね・・・でも早めに渡したいの」

そわそわするコノにレオンは「ーんと考へてから泡だらけだつた手を流して食器を水につけた。

「なら今一緒に行きマシヨウカ？食器はつけておけば汚れは落ちます

カラ」

「うんー、ちょっとまつて、包み持つてくるー。」

元気にはたばたと台所から去るコノの後ろ姿を見てレオンはまた微笑んでタオルで手の水分をぬぐつ。服が汚れないように、と付けていたエプロンを外しながら自分もこの前買つたティアンへの贈り物を手に取る。

「喜んでくれるトシヨウカ・・・」

それからまたばたばたとコノの足音が「ひひ」に向かつてくる。レオンはさつきと変わらない笑顔のままぱつと顔をあげた。

「おやユノサン、見つかりマシタカ？」

「見つかった！見つかったけどさつき窓見たらノクス兄さんが・・・！」

「ハイ？」

慌てたように言つコノにレオンは首を傾ける。と同時に元きこと玄関ホームと台所を開ける扉が開いた。

「おー中はいつもってんのか・・・あ、ユノー。」

「あー、じゃないわよノクス兄さん！ティアンに嫌われてるっていうの知ってるでしょ？館に入ってきたって知つたらどんなに怒るか…。」

「いやしうがねえよ。けもの祭りん時は近所におすそ分けしなきやいけないって母さん決めてんだからよ。それに館の前だけこいつ声かけたぜ？」

「聞こえると思つてるの？」

「思つてた」

「兄さん…」

「はーつちやつたらしょうがねえよな？で？そつちがうわさのレオンつてやつ？」

レオンは自分が固まつたよつに感じた。田の前にいるのは短い栗色の髪を整え、青い田を持つた男性。灰白色の軍服を着ている。

・・・軍服。

「俺、ノクスつーの。田富で文富やつてる。まあ、宜しくな？」

・・・やばい。

「はあレオンといいます妹さんにはよくしてもらつてますえーとすみません俺ちよつとティアンさんの方行かなきやいけないんで席外していいデスカ？」

「いやそんな早口でいつても別になんもしねーつて」

「・・・レオン？どうしたの？」

「すみませんコノせんちよつと先にティアンさんに贈り物してきましたすぐ戻るんでそれまでお兄さんを家に戻した方が無難だと思つたのデスガ」

「いやそれは私も思うけど…」

「心配しなくともこれ渡したらすぐ戻るつてーといふでレオン？そ

の髪長くね？前見えてんの？」

「はい問題ないですそれよりも早く帰った方が・・・」

「ヤーでなにをしている」

レオンの必死の説得もままならず、館の主が静かに現れた。

そのときまでディアンは楽しんでいた。

本に囮まれ、勝手に決められたとはいえた自分が生まれたことを祝つてもらい、あのけものが好んだという料理も食すことができた。しかもそれが自分の口に驚くほど合つたのもあって満腹からくる充足感に包まれていた。

いつたい誰が不機嫌になろうとこいつのだらうか。

しかしその幸せも台所がにわかに騒がしくなるまでのこと。

幸せな時間を邪魔者によつて壊された不快感。  
安全な場所にすかずかと押しいれられた気持ち悪さ。  
様々な感情がディアンの中で入り混じり、それは怒りといつ形をとつて表面に現れた。

「そこでなにをしてこる」

踏みしめた木の床がみしり、と音をたてたよつた気がした。

現れたディアンはびつ見ても怒り心頭といつた風情で

コノはまよい、と体を硬直させた。

母のけもの祭りの時の習慣は知っていたし、近所におすそ分けを持つていくのは本来コノの仕事だった。

コノがいないとなると母がそれを頼むのは幼い兄妹を除いてはノクス以外にあり得ない。

さらに普段あれだけディアンに興味を抱いているノクスがそれを口実にしてこの館に殴りこんでくるのは容易に想像がついた。

けれども

（ノクス兄さんつたらせめてディアンに贈り物を渡す時間ぐらい待つてほしかったわ）

わざわざ渡さなかつた自分を棚に上げてコノはぎゅっと袋を握つて諦めたよつてテーブルの上に置いた。

ディアンはどうやら立腹だし、元凶の兄は冷や汗を浮かべながらけらけらと笑つている。

レオンに至つてはかちりと固まつたままだ。

頼れるのは自分しかいない。

「やだおにーさん超怒つて〜るー ほらほら笑つて笑つて・笑顔の方がかっこいいよ?」

「・・・・・ いいたいのはそれだけか

「いやいやいや俺おすそわけ持つててきただけだつてー誓つて何かしに来たわけじやないし!」

「・・・ 本當だと言い切れるんだらうな?」

「そりやあ噂のレオン君見たかったし？あと愛しの妹が野郎ばつかの場所にいるのもあれだから連れ出そうかと」

「・・・・・・・・・・・・

「やだ黙んないで！怖いから！」

「・・・ふつ」

ざけるな、とディアンの口から感情が言葉となつてノクスにぶつかるその前にユノががつしりと後ろからディアンに抱きついた。いや、身長差のある二人ではむしろしがみついたようにしか見えない。しかし、ディアンはその衝撃に怒りが抜け、むしろいつもより密着する暖かさに内心慌てふためいたようだった。

がつ、と勢いよくノクスと額を打ちあい二人して床にうずくまる結果となつた。

ユノはというとすぐにディアンから飛びのき、仁王立ちして一人を見下ろす。

「ディアンはぴりぴりしすぎよーいくら台無しになつたからつてそこまで態度に表すのは大人らしくないわ！そしてノクス兄さんは人のことをちらかしすぎ！連絡無じで来たなら来たでお邪魔しますの一言もないの？」

そして涙目の一人にさらり一喝。

「ちゃんと謝りなさい！」

「・・・悪い」

「・・・こつちもすまなかつた」

ぼそぼそと謝罪の言葉が両者から流れ、コノはよろしくと満足そうに鼻を鳴らすと今の今まで空気になりきつていたレオンに心配そうに駆け寄る。

「で、レオン？ 大丈夫？」

「エ、エエ。ちょっと驚いてたダケデ。コノさんはす、」  
「お一人を止められるナンテ」

「さすがにティアンは怖かつたけど、まあ仕方ないわね……ち  
よつとノクス兄さん！ それ置いたひわたりと家に帰りなさいよ？」

「はいはい……にしてもおにーさん石頭。めっちゃいいえ」

「自業自得でしょ？」

「おいコノ？ お前いつから兄ちゃんに冷たくなったんだ？」

「知らない」

ぷい、とノクスから顔を背けるコノ。そんなコノにノクスはやれや  
れと首を振った。

ティアンは「……」と言わずに立ちあがつてひたすらじつとノ  
クスを監視している。

幾分かそがれたものの、ノクスに対する怒りは収まつていないと  
う意思表示だらう。

レオンは心配そうにノクスのじぶを見て適当な布を冷たい井戸水に  
浸し固く絞った。

「とりあえずこれで冷やして……ああ、コノさんお願ひシマス」

「いや、俺がそっち行くし。これもついでに渡すし」

「イヒイヒ。そこに置いてくれれば後でしまつておくれのでお構いナ

ク

ノクスがまだ手に持つたままだつた容器を掲げて見せるとレオンは勢いよく首を横に振つた。

そしてじりじりと近づこうとするノクスと距離を取つてまた自分もじりじりと動く。

ノクスの顔が面白いおもちゃを見つけたと言わんばかりに輝く。

「やだなあ、 同い年だし仲良くなろうぜ？」

「イエ、 身分が違いまスシ」

「そんなこと俺は気にしないし…」

「俺が気にするんノクス！ つてうわあ壁！」

「ふつ 隙あり！ 気になつてたんだよなあ その髪…」

「やややややめてくださいツテバ！ ほんとう…」

「ちよ、ちよっとノクス兄さん止めてつて！ レオン嫌がつてるし

！」

「… 追い出してもいいか？」

外野のことなど気にせずノクスが素早い身のこなしでレオンを壁に追い詰め、はらりとその長い前髪を払いのける。

「ほーら別に悪い顔してるわけじゃ…！」

隠れていたレオンの顔が一瞬だけ光に浮かび、すぐに伏せられた。そしてそのまま壁に体重を預けて体制を低くするとノクスに足払いを掛ける・・・がひょいとかわされ、足を引っ張られ無理矢理に床に押し倒された。

強かに頭を床にぶつけたレオンは痛みに呻いてすぐに起きあがろうとするが胸の中心に勢いよく膝を押し付けられて息を一瞬呑みこん

だ。

げほげほげほと咳き込むレオンの前髪をノクスが無表情に掘もつとした、が。

がくりと後ろから襟首を掴まれ引き倒される。

逆さまの世界に影をつくりてるのはティアンだ。

「・・・追い出す、といったのが聞こえなかつたのか？」

ノクスは黙つて身を捻つてティアンから逃れようとするが下から抗う力より上から押し付ける力のほうが強い。

どうあがいてもティアンに押さえつけられると悟つたのか、ノクスは軍服のポケットの中からナイフを取り出した。

傍観していたユノが軽く息を詰め、ティアンは警戒してノクスから距離を取る。

「兄さん、いくら怒つたからって刃物なんて・・・？」

「・・・傷つけたりはしねーって。何勘違いしてんだユノ」

弱弱しく笑い、ノクスは倒れたままのレオンに向き直る。

レオンは血相を変えて両手を使いノクスから逃げだそうとするが、それはいとも簡単に片手で押えられる。

ナイフを持った手がレオンの顔の前で一閃される。じやき、と音がして一瞬後にはさつと黒いものが床に落ちる。

「よお、明るい世界はどうだ？レオンさんよお

ノクスは無表情に自分を睨む憎々しげな赤い目を見つめて静かに言った。

## てかがりもの

「なあ、レオン……いや、『従者』か？」

無表情に見下るノクスの目を憮々しげに睨むレオン。

初めて見たレオンの目にコノは一瞬顔を背けてはこわこわと視線を戻した。

目の色は赤。しかしそれよりも注目するべき点がレオンの目にはあったのだ。

白目がなく、まぶたの下にあるのは赤く染まつた虹彩だけ。瞳孔は明るいためか、針の穴ほどの大きさに縮小してしまっている。

例えるのならば小動物の目が人間の大きさになり、それが赤くなっているとでもいおうか。

小動物ならば可愛く見られても人間の顔についているとそれは違和感や嫌悪の対象にしかならない。

なるほど、レオンが前髪を切られたがらなかつたわけだ。コノやまだ幼い双子には刺激が強すぎると考えていたのだろう。

ノクスは自分で切つたレオンの髪を床に落としながら軽く肩をすくめた。

「にしてもすげえな……白目がないなんて。文献でしか見たこと無かつたけどそりゃ隠したくなるよなあ」

『・・・何が目的だ』

「目的つてそりゃあ判つてんだろ? 『従者』なんだかいり

『従者』といつ言葉を聞いた途端にレオンの方がびくっと震える。割り込めない空気に押し戻され、コノとティアンはお互にこわいわと会話を試みた。

レオンの隠された素顔に圧倒されはしたが、レオンはレオンなのだ、なんの関係もない。それよりも彼らの話の内容が気にかかった。

「ねえ、『従・・・じゅうぢゅう?』ってなに? 何語なの? ていうかレオンなんて言つてるの?」

「・・・わからない」

「は?」

「少なくともこの館内にある本の中にはないな  
「どうゆうの?」

「首都・・・もしくは王宮にだけ伝わっているけものの話があるのだろう。けものと王族は繋がつてこる。王族にだけ語られる話があつてもおかしくはない」

ぼそりとティアンが呟き、それをかき消すようにコノ達にはわからぬいレオンの言葉が響く。

『俺は・・・俺はただここで穏やかに暮らしたいだけだ!』

『じめんなーでもこっちもやつと得た手かがりなんだよ。何百年かけてると思つんだよお前ら捕まえるのに』

『それこそ知つたことじやない。勝手にそつちが探してるだけじやないか!』

「ああそうだ。勝手に探してるんだ。だからこそ余計に近くまで来たチャンスは逃せられねえんだよ察しろ」

レオンはまきりと顔を曇るとぼそりと呟く。

それはとても小さな声でコノ達のところまでは聞こえてはこない。けれどノクスには十分な声量だったようで無表情が崩れた。

「それで済むとでも？舐めてんじゃねえぞ。それこそ文字通り首輪付けて引きずってでも首都につれてくわ」

ハツとした表情をしたレオンにノクスは手早く手刀を振り下ろし、意識を刈り取つた。

だらりと弛緩したレオンを抱え上げようとしたノクスの肩に手が置かれる。

ノクスはガツと険しい顔で振り向きざまに手をつかみ、それから困った顔をして妹の名を呟いた。

「・・・ノクス兄さん・・・」

「あーゴノ。許せ、これも仕事なんだ」

兄の今まで見たことのない顔に怯える妹にノクスはどうにかしていつも通りを装つた。

昔ならばここで泣いているであろう妹は気丈にも涙をこらえ、ノクスは成長した妹を寂しげに見つめた。

「嫌だよ、レオンどつかにつれて行かないでよ・・・。話全然わからんないけどレオン嫌がってるじゃない」

「・・・まあ嫌がることを強制してるからな。嫌われても当然だ」

「そんなの良いわけないわよ！ なんだつたら私もついていく！」

「だめだ」

きつぱりと自分の考えを否定され、一瞬ユノが戸惑つ。ユノの視線を避けるようにノクスは目を閉じて首を横に振つた。

「俺はあんたこにお前をつれては行きたくない。なによりも兄として」

「そ・・・」

「聞き分けてくれよ、ユノ。わかるだろ?大人の事情つてやつだ」

ノクスに諭されたユノはぐつと息詰まつてうつむいた。

その様子を見ていたディアンがぼそりとノクスに話しかける。

「・・・前俺にどつかの殿下に似ているといつていたな?」

「なんだよ急に。認めるのか?」

「王宮に行つてやる」

「はあ?」

「な、なにいつてるのディアン?館から出たくないんじゃないの?」

「・・・出たくはないが出れないというわけじゃない」

あつけにとられる兄妹にディアンはさらに言葉を畳みかける。

「レオンのことといい、『じゅうじゅ』などと俺の知らない単語といい、そこには俺の知らんけものについての知識がありそうだ」

「・・・王族に戻ると?」

「殿下になるつもりはない。が、どうせお前が勘違いしてつれて行くつもりだつたんだの?つだつたら研究のため自主的に行つたほうがマシだ」

「・・・ふーん」

ふんふんと頷くノクス。ディアンも行つちゃうの・・・?とやがりに俯くユノをちらりと横目で見てディアンは言葉をつづけた。

「・・・だが一つ条件がある」

「何だ?おにーさんを引っ張り出すためならどんなものでも用意するぜ?」

「身の回りを世話してくれるヤツが欲しい。血縁じゃないが俺は一人だと勝手に飢え死にする上にそちらの他人じや満足しない」

淡々と告げるティアンの言葉にユノの瞳が輝いた。

「わ、私!私 ついてく! だのに6年ティアンのお世話してないわ!」

「・・・へつて やうきたか」

心底悔しかつてノクスにティアンが涼しい顔で聞き返した。

「なんだ、不満か?俺を王宮とやらこつれて行きたいんだろ?」

「ああもう勝手にしろよ! あとユノ!」

「え、な何? ついていくからね! 置いてつたりしないでね!」

「しねーよ。じゃなくて」

頭に?マークを浮かべて首を傾げて見せるユノの髪をぐちゅぐちゅにしてノクスは哀しげな表情で言った。

「「めんな、だめなにーちゃんで」

「? ?」

「とつあえず」つは逃げない様に俺が預かつとく。出発とやらせまあ明日話すわ。じゃユノ、俺今日家帰りずて宿泊まるから

「ああうん・・・」

ぱたん、と扉が閉められてユノは茫然自失気味に呟いた。

「 . . . あ、洗い物終わってない . . .  
「 . . . 僕も手伝ってやるから  
「

## ふあんもの

「よう

翌朝屋敷に現れたノクスは昨晩のことなどなかつたかのように懶ら  
しいほどの笑顔を浮かべてそう言つた。

これ以上館内に侵入されたくない一心で玄関のホールでノクスを出  
迎えたディアンは対照的にちつと舌づちを返す。

「何の用だ。これから出発するといわれてもまだ準備はできてい  
ないが」

「やだなあ台所でガン飛ばしあつた仲じやないかそんなに嫌がらな  
いでよ、大丈夫今日は別のこと話を話し合いに来ただけだつて！……  
ユノは？まだ来てないのか？」

「午前中は約束がある、と言つていた。 聞いてないのか？」

ディアンの返事にノクスはあーと妙な声で呻いて短い栗色の髪を軽  
くかき回した。

「それが聞いてないんだわ、昨日家に帰つてなくて。 ユノが来る  
までここで時間つぶさせてくれない？」

「…………わかつた

「ですよねーってあれ？」

これまでのディアンの反応から断固拒否されるものと決め付けてい  
たノクスは予想外の展開にあつてにとられて目を点にする。  
しかしディアンはノクスを置いてせつと書庫へと続く扉を開けて  
行ってしまう。

自分の巣の中に仇のように嫌っていたノクスを受け入れることに好意的なものがあるとは考えにくい。

ならば罷か。

ノクスは一瞬考えて脳内で首を横に振る。

保身を考えるのは苦手だ。今はレオンという人質がいる以上危害は加えられないはず、と考え歩を進める。

（あーくそ、いつから俺は打算を考えるようになつたんだつーの）自嘲しながらノクスは肉食獣の待つ巣へと踏み入れた。

今日はけもの祭りの一日前。まだまだ街から喧騒は抜けきつていない。道を歩いていると昨日はしゃぎすぎた酔っ払いたちが倒れ伏しているのが目につく。コノはその酔っ払いたちの間をすり抜けながら道路に落ちているごみを拾っていた。

大人たちは警備やら店やらで忙しく、祭り中の美化作業はコノのような子供たちの仕事だった。あるものはコノと同じくごみを拾い、あるものは顔を顰めながら水を撒き散らし吐瀉物を処分する。ごみといつても手で拾えるような紙くずや煙草の吸い殻、大きくて酒瓶ぐらいのもので、単純作業の合間にコノは昨夜のことに思いをはせていた。

昨日コノが家に帰つてもノクスはいなかつた。おそらく宿屋で一夜を過ごしたのだろう、レオンの監視も兼ねて。

あれからレオンはどうなつただろう。ノクスのことだからあれ以上何もしていなさそうだが、しかし昨晩のノクスは何かいつもと違つていた。

確かに暴力で冷酷な兄は見たことがなかつた。けどそれ以外の何かが違つている気がした。やはり首都にいった所為だからなのだろう

か。

「…わかんない」

「何がわからないって?トングの使い方なら俺んとこでやんなるほど使つてるよな?」

「…………」

「おこどりしたよコノ」

「お願い今度急に声掛けるときは何か合図して」

「さつきから手え振つてんの無視したのはそつちだ」

ふん、と鼻を鳴らしたミリスは顎をしゃくって見せる。見るともう清掃活動は終わつたらしく、あたりに子供の姿はなかつた。かわりにどやどやと屋台の準備がはじまつてゐる。ごみを指定の場所に置かないとお駄賃が貰えないのだが、ぼやーっといつまでも立つてゐるコノにわざわざ声をかけてくれたらしい。

「「」みの回収はあつちだつてよ、つて親切に教えてやつてんのにお前はぼーっとしやがつて」

「あ、ありがと」

「ほりそれ貸せ、持つてやるから」

「うん」

そこそこの量が入つたごみ収集用のバスケットをミリスは軽々と持ち上げる。もう片方の手には水が入つてゐたと思しき鉄のバケツが下がつてゐる。そつちにも中々の重量感はあるはずだが、それを感じさせずミリスはひょいひょいと人と人の間を縫つて行く。

基本的にミリスは優しいのだ。

何も言つてないのに荷物を持つてくれるし、自分の勉強があつて大変だらうに店番も進んでやつたり、近所の子供を構つたり。今だつてほら、さりげなく人ごみからコノの盾になつてくれてゐる。

けれど首都に行つたらもう会えなくなる。ふと考へたユノはそれを  
考へもしなかつた自分自身に茫然とした。

ミリスだけではない。

いつも通つてゐる八百屋のおつちやんやミルク屋のおばちやん、肉  
屋のお姉さんそして母や弟妹にだつて当分会えなくなるのだ。

そこまで考へ、ユノは不安になる。

変わらないものはない、けれど首都へ行つてしまつといふの人たち  
とは決定的に変わつてしまふかも知れない恐怖はいかんとも知れな  
い。

勢いとはいえ首都に行くことを決めた。レオンやディアンについて  
いくことを決めたのだ。

そこに後悔はないがそれでも揺らいでしまう。戸惑つてしまつ。  
自分にとつて彼らはそんなに大事な存在だったのか、考へてしまつ。

いつの間にか立ち止つていたらしい。

気付いた時にはミリスが戻つてきてバスケットとバケツをひとまと  
めにし、ユノの腕を引いて歩いていた。そして心配そうに顔をこち  
らに向ける。

「おー、どうしたんだつてわしきから」

「な、なんでもないわ…」

「よくねえよ。体調でも悪いのか?なんだつたら後で屋台まわる  
一つて言つてたやつらになんか言つとくけど」

暖かい気遣いに又決心が鈍る。

ユノは無理やりに笑顔を作つて見せた。

「なんでもないわ

それでもたぶん、私は行くだろ、うから。  
心中で呟いたユノは収集場所へ行く足を速めた。

「だーかーらー、夜のうちに移動つて無理言つなつての！夜つてわかる？山賊やら獰猛な動物やらわらわら出てくんだつて！昼間のほうが安全かつスピードィーに首都につくんだつてばー！」

「ならば行かない」

「てめー行きたいのか行きたくないのかどっちだつての！しかもこの量の書物持つてけつて鬼か！そりやあ確かに貴重な資料ばっかってのは俺にだつてわかるけどよ、俺の給料は貸し馬車丸ごと一つ借りられるほど余裕ねーんだよ、下つ端の給料なめんな」

ミコスたちの誘いを断つたユノは館中に響く言い争いに顔をしかめた。

よくよく耳を澄まさなくともわかる、この声と言葉づかいはノクスだ。言い争いはなぜかディアンが入れたがらなかつた書庫に続く扉から響いている。さては和解したのか。

扉を開けようとしてユノは少し躊躇した。

時間が経つてから顔を合わせるのは大変気まずい。が、このまま会わないでいることもできない。

「…よし、」

扉の前で小さく覚悟を決めたユノは恐る恐るまだ一方的にうるさい部屋の中を覗いた。

部屋の中ではノクスがこちらに背を向けて胡坐をかけていた。ノクスの正面で頬杖をついて座つてゐるティアンは手持無沙汰に本をぱらぱらとめくつてノクスの言い分に没面を作つてゐる。

けれど実際それより渋い顔をしているのはノクスだらう。髪をかき乱してゐる後ろ姿を見ると心底困り果ててゐるのがよくわかる。

「あーもー この際貸し馬車はいいとしよう、経費で落ちつかもしんねーし。でもなーわざわざ危ない夜に出るつてのは贅成しねーよ? つーかなんで夜なわけ?」

「答えてもいいが、もう一人を話に入れなくていいのか?」

ちらり、とティアンがノクスの背後に目をやる。その視線を追うようになノクスも腰をひねり…

「お、おはよう、兄さん」  
「あ、あーうコノ。昨日ぶりだな?」

きじけなく兄と妹の挨拶が交わされた。

なんとなく変な空氣になつた書庫を抜け、話合いの場を台所に移したコノたちは茶を目の前にまた気まずい沈黙が流れていった。

お茶受けはコノがなんとなく買つてきていたクッキーだ。屋台で売られていたのでいつもより値段は高めだつたが、増量していることを思えばそれなりの相場だらう。

ぱきりと甘みの少なく歯ごたえのあるクッキーを前歯で折つて口の

中で転がす。

力を込めて噛むとじわりとバターの油と甘みが合わせて口の中に広がった。

クッキーのかけらを飲み込んでずすっと茶をすすり、ディアンはひたとノクスを見据えた。

「さて、教えてもらおうか」

「何をだよ？」

「レオンだ」

びくり、とコノが震えた。先ほどからこの話題をどう口に出そうか思いあぐねていたのだろう、真剣にノクスを見つめる。ノクスはその強い視線に負けたかのように顔をそらした。

「・・・自分で調べるんじゃないのか？」

「“じゅうしや”についてはな。だがレオン自身が首都に送られどうなるかは教えてもらつてもいいだろ？？」

ふん、とティアンは鼻を鳴らし、じくじくと額くコノ。2対1では多いほうに軍配があがる。

はあ、とため息をついて天井を仰いだノクスは俺もよく知らぬ一けどよ、と前置きをした。

「まあ、軟禁、つてとこかなー、知つてること教えてもらつだけだし。あとは首輪付けて以下略

「以下略つて何よ」

口をとがらす妹に兄は勘弁してくれ、と大げさに諸手を挙げた。

「 」 うちにや あ守秘義務つてのがあるんだ、 そう簡単に漏らしてたまるかよ。 それにそのために首都に行くんだる?」

「 」 」

「 僕としてはおにーさんが来てくればいいし、 おにーさんがユノ連れてどんな思惑腹に秘めてようと俺には止めようがない。 それでいいじやねえか。 まあレオンつー“ 従者” に書は与えないことぐらいは教えとくけどよ」

「 」

黙りこくつたユノを尻目にまたディアンはまた茶をすする。

「 それでどうやつて俺たちを首都につれて王宮に入れるつもりだ? まさか堂々と俺を皇子とやらに仕立てあげるわけじゃないだろ? しかし客人とするにはこちらの身分はあまりに低すぎやん」

「 よくぞ聞いてくれました!」

にやり、 とノクスが笑い、 懐から何やら巻物をとりだした。くるくると上質な紙を開いていくと立派な文字と想像上のけものと剣が合わさつた金色の王家の紋が目に突き刺さる。万が一にも茶をこぼさないよう、 避難させたテーブルいっぱいに広がつた巻物には小難しい言葉でいろいろと書き連ねてあつた。ディアンはそれを素早く默読すると得意げなノクスを真正面から見た。

「 どうやら杞憂だったようだな」

「 王宮じやあ最近けものについての研究が盛んでね、 しかしなぜかものに関する研究はあまり進んではいない。 ならば國中をめぐつて有能な学者を集おうとお考えになられたのが第5皇子サマ。 で、 その人となりを見たり、 知識の量を見たりして使えると思つた人材を首都にしょっぴくのが俺の表の仕事」

“じゅうしや”探しとやらは裏の仕事というわけか

「そうそ、だからこの表を最大活用させて連れて行こうってわけ。

幸い、おにーさんもなかなかの研究者みたいだしなー」

くるくると巻物を巻いて、ノクスは大切そうに仕舞う。  
そして乾き始めた唇を茶で湿しながらコノに關しては、と口火を切つた。

「学者のなかにはめんどくさいと要求するやつもいてなー、生きる知識だからなるべく意に沿つようにはしてんだ。で専用の侍女をつけてくれ、っていうのは日常茶飯事。学者自らが持つていくってんだけたらこっちも新しく侍女雇わないで済むし、コノも知らない家で花嫁修業しないで済むしで一石二鳥。信頼のある俺の妹つてこともあつてまあすんなり通ると思うぜ」

「まで、それはいい。花嫁修業っていうのは何だ」

「え、ディアン知らないの？」

ユノが驚いた声をあげた。隣に座るディアンはとことじりりとコノを見下ろすばかりでうんとも言わない。

「これはせつせと教えるとこつことか。コノは首を傾げた。

「んーと男が学校や仕事に行く間の家事や畠仕事は主に女子どもが担当するの。でも男の子はすぐ学校に行ってしまうし、娘ばかり家にいてもあればだから世間を知るためにも他の家庭にお手伝いとしてお邪魔させてもらひ、つて母さんが言つてたわ。でそのことを花嫁修業ともいつて」

「おーそつそがユノー！そつそつそんな感じ。まあ俺としては可愛い妹を知らない野郎の家に預けるよりかはおにーさんとこで侍女でもやついてくれた方が安心つてわけ。王宮にまで連れていくのは反

対したいトコだけど本人が覚悟きめてんだつたら俺も腹くくるしかねえわな

カ力カ力と笑ったノクスはユノの頭をなでてやろうと手を伸ばしたが、ユノの強張った顔を見てふと腕を下ろした。そして何事もなかつたかのように腹減つたなーなどと嘯いて今度は財布を取り出すとこりかりとしてユノの前に銀貨を置いた。

「で、ユノ、金やるから屋台でミルティーコ（ジャンクフードの一種 クレープに似て、すりつぶした穀物をミルクで解いて薄く焼いた生地に蒸した鶏肉と甘辛い味噌が入つてゐる）買つてくれんね？むしょーに食べたくて仕方ないんだわ」

「へ？ 嫌よ、自分で行つてきてよ」

「そーいわづにー ほれ、銀貨一枚ありや足りんだろう？余つたの

何でも好きなもん買つてきてもいいぞ」

「でも…」

なぜ私が、と言いたげな顔を隠しもしないユノをノクスは追い立てる。

「ほら、早く行かないと一番いいところが売り切れちまうじゃねーか。いつたいた」

「…しあうがないわね… 銀貨全部使つちやうからー」

「おーおー 好きにしろー」

ギイバタン、と玄関の扉が閉まる音を確認してティアンは改めてノ

クスに向き直つた。

「で、本当のところはどうなんだ、花嫁修業とやらは」

「本当も向もユノが言つたとおりだ」

苦笑しつつノクスは言つ。さすがに今回は露骨過ぎたらしい。さすがに今まで出して妹の席をはずさせるのはまずかつたか。

「ただ、その『お手伝いさん』に手え出す口に「コン野郎の多いこと、多いこと。そのことを皮肉つて『花嫁修業』なんて名前もついちまつただけの慣習さ。まあ中にはそのことを見越して裕福な家庭で働いて既成事実を求めるお手伝いさんがいたりすつけどよ。もともとはユノが言つたことに加えて一つ屋根の下で暮らし、その家庭のことを学んで男女の愛を深めるためのもんだったつていうけどな」「過去の慣習や儀式が時代を経て別物になりかわるのはよくあることだ」

「そーなんだけどなー」

はあ、と息をついてノクスはもつすつかり冷めてしまつた茶を呷つた。

ぬるいと呴いてぐつたりとテーブルにつつ伏せる。

「…今から俺の独り言」

「…………」

「俺さあ、今一番大切なのは家族なわけ。特にユノは可愛くて可愛くて仕方ない、それこそ癒しなわけよ。でさあ、男つてあれじやん、好きなやつにはいいところしか見せたく無いじやん。間違つても怖がられたくないわけよ。けど昨日へマしちまつて見事にユノに対する俺の信頼感。それどころかレオンつて“従者”を捕えてからはなんていうの、敵意?を向けられちやつたらさあ。さすがの俺もまといつちまつわ」

「…………」

「俺だつて王宮で働いててしかも皇子サマの近くにいる以上敵はい

ん。そいつらの敵意とか害意とかもうコノとのと比べたら屁でもないね。あいつらが針だとしたらコノのはあれだ、何億もの剣に刺されてるみたいな?それでもさあ

「…………」

「嫌いになれねーんだよ、つーか無理。嫌いになれたら俺自分を信じられないってくらいにやばいの、病的つてこーゆーこというんだなってくらいにやばいの。わかる?でその大好きな大好きな妹をだよ?俺を田の敵にしてる王宮なんかにつれてけますか。俺の弱点を虎視眈々と狙つてるやつらにほいこれが俺の弱点ですって晒せますか。無理だろ。馬鹿だろ」

「…………」

「まあそれがコノが王宮に来ること反対の理由の一つ。でも一つはコノを傷つけられたくないんだわ、肉体的にも精神的にも。まあ今んとこ傷つけてるのは俺なんだだけよー……」

ノクスは自虐的に騒うと顔をあげてディアンを見上げた。

「で、だ。おにーさんに願いがある」

「なんだ、独り言は終わつたのか」

「終わつたけど終わつてねーよ」

そして伸びをして筋をぴんと伸ばす。

「守ってくれとは言わない。でも見ててやってくれ。手を貸すのも貸さないのもおにーさん次第。ただし手え出したら殴る」

ディアンはただ片眉をあげただけだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3584o/>

---

ひととけもの

2011年11月20日11時30分発行